565
112

始

石川義昌
川西正鑑 共譯

カッセル 新經濟學概論

富文堂版

大正
15. 12. 24
内交

565-112

譯者序

本書は Gustav Cassel, Fundamental Thoughts in Economics, 1925. を譯述したもので、これを譯者が恣に「新經濟學概論」と改題した所以は、原著序文および本論中に散見する如く、ロンドン大學でなされた教授の本講演の目的が實に新經濟學 Advanced Economics の概念を闡明するにあつたのと、今一つはその學說が從來の經濟學に對し全く獨自の、新しい原野が開拓されてゐるために外ならない。

原書は四六版百五十九頁の小著に過ぎず、且つ教授には大著「社會經濟理論」を始め、數多の著作があるが、しかし教授も序

文中で云つてをらるゝ如く本書は全く教授の全經濟學的思想を壓搾したものである。かゝる意味に於いて本書は一面には新經濟學の方向を指示し、他面には教授の全思想を窺ふに足るものと信ずる。

猶ほ我々に對し、教授が喜んで飜譯權を與へられ、且つ親しく多くの注意と奬勵の御言葉を與へられたことを感謝して已まない。

大正十五年十一月

譯者識

序

或る科學者が他國に於て他國語で出版された長篇の論文著書を物した場合に人は屢々、それ等の論文著書の基礎を成し或はそれ等を緊密な一つの全體に統一する根本思想を明にしてゐる。彼れの述作の短い梗概があるといふことは極めて有益なことであると感ずる。私自身としても、私の經濟學上の著述の嚮導概念を斯樣に詳說するのが私の義務であると長い間考へてゐたのである。本書はこの義務を果さんと力めたものである。私が本書を書くに至つた直接の動機は、「新經濟學」に就いて連續講演をせよ、といふロンドン大學からの招聘にあつた、而して私は印刷に付する爲め特に書き留められた所に從つて、玆に同講演を上梓する次第

である。

本書の主題が經濟理論に取つても實際的經濟政策に取つても本質的に重要な經濟諸問題の大部分を包含してゐるといふことはその性質上實に當然のことなのである。これ等の諸問題をより深く突込んで理解しようと欲する何人に取つても本書は直に眞に有益であることが明かとなるであらうと思ふ、而して又讀者が書中に取扱はれてゐる主題を一層よく理解せんと欲するならば、廣く私の主著に就いて研究せられんことを敢へて希望する次第である。そこで私も主著參照の便宜に脚註を附して置いた。

一九二五年六月　ロンドンにて　グスタフ・カッセル

目次

第一章　經濟理論の目的と方法……一
第二章　價格理論としての經濟學……
第三章　稀少性原理と費用の概念……九五
第四章　貨幣の稀少性理論……一四五

カッセル 新經濟學概論

石川義昌
川西正鑑 共譯

第一章　經濟理論の目的と方法

倫敦大學で新經濟學に就き何か講演せよといふ招聘の光榮を辱ふした時、私は當然私の研究の中心を占むる點を詳說すべきことを期待されてゐるのだと感じた。處で一番の中樞は明かに全研究の基調を成す根本的諸原理、卽ち種々なる研究を一貫してこれを論理的一體となす諸概念で

ある。そこで私は茲に私の經濟學上の研究に於いて私を導き、而してそれ等の研究を結合して緊密なる經濟學體系を形造る嚮導的思想の説明を試みることに決めた。

勿論、私は凡ゆる眞理がこれより演繹し得られ、又現實が否應なしにこれに適合するやうに壓し込められねばならぬやうな既成の體系を想像しつゝ私の科學的研究を始めたのではない。これは決して眞に科學的な研究方法ではない。惟ふに私は、若し、私の種々なる研究が、決して完全ではないが、或る意味に於いて經濟學體系と呼ばれ得るやうな統一體を形成してゐるならば、それは私が凡ゆる階段に於いて私の目的と方法とを局限することなくこれが決定を專ら研究せらるべき主題の本質的に「經濟的な」性質に據らしめんとしたに因るのである。若しも我々が常に

この原則を守るならば、經濟理論に於いては從來一般に信じられてゐたほどに自由裁量の餘地がないであらうと思ふ。事實上、經濟生活には多分の必然性が有り從つて又この生活を分析する方法にも多くの必然性が存する。唯重要なことはこれ等の必然性を見付け出すにある。若しも我々がこれをなさんと試み、而して常に我々の注意を、研究せんとする事物に於いて本質的——純粹に經濟的な立脚地から觀た時に——なものに向けて置くならば、我々の得る結果は自然的結合性と論理的統一性とを有することゝなるであらう。

今日私は、この指導的立脚地に基き、私の觀た所に從つて、經濟理論の目的と方法とを簡單に説明しやうと思ふ。

經濟學が明かにすべき第一の問題はそれ自體の存在の立證といふ問題

である。斯學の對象は經濟生活である。されば經濟生活の側に立つて唯これを傍觀するのみで眞の經濟的出來事に關しては第二次的な知識しか得ることの出來ない人々よりも、この經濟生活の眞唯中に生活し、而して實際に經濟問題に携つてゐる人々の方が一層よく經濟生活といふものを知つてゐるのではなからうかといふ質問の出るのは極めて當然な話である。事實上大抵の代表的經濟學者よりも工業商業及び銀行業の巨頭連の方が往々にしてその銘々の分野に於いて如何なることが實際に發生しつゝあるかをよく知つて居る。この點に於いて科學は何といつてもハンディキャップを付せられてゐる。故に、若し、經濟學が何とかしてその存在を立證し得るとすれば、それは斯學には實際家からは閑却されつゝも、猶ほ且つ本質的に重要にして必要なる獨自の目的が存するが故であるに相違ない。事態斯くの如くであるからして、經濟生活に關する科學的見解と實際的見解との相違を一層仔細に分析するといふことは、斯學がその獨特の職能を明瞭に意識せんと欲する場合には極めて有益なことである。

先づ第一に、科學は、因果を論ずるに當つて、常に「全複合體*」をその對象としなければならない。連鎖の中から勝手に選擇された如何なる環にも停滯することは出來ないのである。必ず經濟的實在に於いて到底分離され難いまで相互に關聯した出來事の總體を考へなければならないのである。實業家に取つては、多くの場合その活動の最も直接な結果を正確に判斷することさえ出來れば充分なのである。若しも彼れが尚ほそれ以上溯つて考へようとすれば、彼れは恐らく活動すべき時間を失ふの

* whole complex.

みならず、活動せんとする意志の集中さへも失ふかも知れない。彼れに對しても亦彼れ自身の業務は、彼れに取つてはそれが經濟生活の中心點となるやうな或る重要さを有するのである。科學が斯くの如き見解を採ることは不可能である。科學は經濟生活を一つの全體として考へなければならない、故に個々の實業家の立場からは遠い結果であつても、科學的立脚點からは少くとも近い結果と同じく重要なこともあらう。

實際上、經濟學は、原則として必ず全き經濟的單位をその對象としなければならない結果となる。換言すれば經濟學は常にその分析せんとする經濟を、それ自身の中に閉塞されて外部の世界と何等の關係もないものと假定しなければならない。何んとなれば若しも斯くの如き何等かの關係にして存在せんか、因果の全系列を完全に把握するには、これ等の

關係までも考慮に入れることが必要となるであらうから、即ち研究の對象を擴張して、より大なる而かもそれ自體完全なる經濟的單位を考へることが必要となるであらうから。選擇される單位は、例へば孤立した農民の經濟の如く小さいものであることもあらうし、或は又近代人の經濟若しくは全世界の經濟といつた風に大きなものであることもあらう。その對象は研究の性質に依つて決定されなければならないが、何れにしてもそは閉塞された經濟たるべきであるといふことが本質をなすのである。

斯かる經濟は必ず多少の擴がりを有する社會的組織體である、從つて、經濟學の對象も亦常に本質的には社會的現象である。このことを强調する爲めには、我が經濟學の對象を『社會經濟*』と指稱するを適當とする。

* Social Economy

これ亦私がこの問題に關する私の主著を「社會經濟の理論」Theoretische Sozialökonomie, The Theory of Social Economy. と名付けた所以である。*

事實上經濟問題を取扱ふに就いて社會經濟的方法と私經濟的方法との間には本質的な相違が存在する。その相違たる實に大なるものであつて私經濟的意味に於いて用ひられた場合には全く正確な言葉も、社會經濟學に適用された場合には絶對的に誤りとなることも或は存する。例へばより多くの貨幣を有つことは個人に取つては確かに利益に違ひないが、社會に取つてはさうでない。私經濟的立場からするときは全く可能なる多くのことも、社會經濟全體に擴大されるときは不可能な場合があるであらう。例へば資本の消費は、個々の資本家には單純なことのやうに思はれるけれども、社會に取つては、局限されたる而して全く異る意味に

* 倫敦、フイツシヤー・アンキン、1923, 紐育、ハーコート・ブレース會社、1924

於ける場合の外は、不可能のことである。

經濟學が實際的な經濟的考へ方と異る今一つの點は、斯學が常に經濟生活の「實在」の捕捉を目標としてゐるに對して、實業家はその經濟的推理に於いて、多く外形だけで滿足してゐるといふことである。こんなことをいふのは一見したところ聊か大膽のやうに思はれるかも知れない。人は先天的に、實際家は具體的實在に最も近くをり、理論家はどちらかといへば抽象的見解に偏するものだと信ずる傾きがある。けれども、經濟的分野に於いてはさうでない。眞に近代的經濟生活は凡ゆるものを貨幣といふ極めて抽象的な言葉で表現する慣習となつてゐるので實際家には單なる數字が唯一の實在のやうに思はれてゐる。所得は金額で表され、而して我々の實質的所得は我々が消費する財貨及び勞務から成ると

いふやうなことは極めて奇異な考へのやうに感ぜられる。一個人の富は幾何かの貨幣として示され、而して若し彼れが一層富裕となれば彼れはそれだけ多くの貨幣單位を所有してゐるのだと想像せられるのである。彼れは最後の年に恐らく「十萬磅儲け出した」だらうとしやう、さうするとこの所得は何時でも租稅等如何なる目的にも費消され得るやう金庫の中に藏はれてゐる一定の金額と見做される。大戰の戰費は數字で計上され、戰勝國民は賠償金を幾十億取ることこそ望ましく又正しいことであると考へてゐる。併しながら彼等は敵國民の輸出貨物の剩餘を支拂ひとして受取るのを奇怪且つ不愉快だとしてゐる！　かゝる觀察の仕方は先づ第一に外形を貫いてその背後に潛む實在を捕捉することを以てその目的としなければならぬ社會經濟的研究に取つては明かに不可能である。このことは必ずしも容易な業ではない。實際、經濟學者が如何なる方法でこれを能くし得るかは大いにその業績の科學的價値と實際的有用性の決定的要因を成す。

經濟學は勿論實際生活に於いて經濟的實在を表現する所の貨幣形態を考慮しなければならない。その結果多くの場合に於いて經濟的現象を二重に記述する必要が生ずるであらう、卽ち先づ實質的實在の見地からするものと、次に通常現象を表現する所の貨幣形態の見地からするものとの二つである。かゝる事情からして私は、既に根本的概念を說明するに際して一方に於いては實質的資本、實質的所得と謂ひ、他方に於いて貨幣資本、貨幣所得と謂ふが如き二重の術語を取り入れるに至つた、但し第二に擧げた術語はこれをして實生活上の普通の言葉と一層よく調和せ

しむる爲め、これに代ふるに單に資本及び所得の語を以てするも差支へないであらう。

經濟學の方法及び觀察は單に實業家のそれと異るのみならず、又本質的な諸點に於いて、通常經濟政策に於いて重要な地位を占むる諸觀念とも異る。政治家は職業柄動もすればその全注意を「勢力」に集中する、從つて彼れとしては充分な政治的勢力を恣にすることさえ出來れば經濟界に於いてどんなことでもなし得ると考へるのは至極當然なことである。實際、政治家は、單にその勢力を利用したばかりで自分自身の方策の論理的結果をも發生せざらしめ得るとさへ信じてゐる。このやうに勢力を重大視するのは當然に勿論全く非科學的なことである。實に、經濟學の最も重要なる任務の一つは經濟的事實竝びに必然的な經濟的關係が成就され得べき事柄の上に加ふる制限を明かにすることに在る。勿論人間の意志は凡ゆる經濟的活動の方向及び範圍を決定し、從つて亦或る程度に於いて全經濟行程の結果をも決定する。これ實に吾人の名付けて社會經濟と稱するものゝ眞の本質である、が併し凡ゆることが順調に運び又凡ゆることが成就され得るとは決していへない。牢乎たる限界が存在し、而して吾人の任意に排除し得ざる儼然たる事實と必然的關係とが存するのである。

全く素朴な政治的勢力の過大視が廣く社會組織竝びに社會制度の理想的形態に關する思索の領域に於いて重大な地位を占めてゐる。多くの人が諸々の弊害、より一般的にいふならば經濟生活の香ばしからざる出來事及び望ましからざる事實が常に社會組織竝びに社會制度に於る根本的

誤謬に原因すると考へるのは極めて自然なことである。この考へが自然人々をして社會改造に要する充分な政治的勢力さえ有つてをれば殆んど如何なる改善をも容易に齎らすことが出來ると信ぜしめるに至るのである。尙ほ進んで仔細に點檢するときはこの全く素朴な觀念の領域が凡ゆるユートピヤ及び總べての革命的目的の窮極的の出發點をなすことが判明するであらう。從つて吾人の經濟生活の諸方面が如何なる程度まで社會組織竝びに社會制度に依存してゐるか或は如何なる程度までそれから獨立してゐるかを檢討するのは非常に重要なことである。經濟理論の最も重要な任務の一つは實に玆に存するのである。この任務を果たす爲めに經濟理論は、その凡ゆる研究に於いて、その結果が如何なる程度の妥當性を有するか、その結果が果して特殊な社會形態から獨立したものかどうか而して如何なる程度まで獨立してゐるか、又獨立してゐるとすれば、吾人の想像に上り得る他の社會形態に於いてはその結果がどんな風に顯現するだらうかといふやうなことを明かにしなければならない。例へば、貨幣に對する利子なるものは或る方面から見て正當でない、從つて合理的に出來上つた社會に於いては存在しないだらうとせられるときに、利子現象が如何なる程度の必然性を有するか或は又それが吾人の社會秩序とは根本的に異る社會秩序の下に於いて如何なる形態を採るであらうかといふやうなことを明かにするのが科學の職能である。斯くの如き研究に依つて經濟的必然性は新社會建設の勝手氣儘な計畫ばかり樹てゝゐる素人が考へてゐるよりは遙かに重要なものであることが明瞭となるのであらう。社會狀態の熱心な研究者が誰でも社會經濟の理論に訴へ

ることは勿論極めて重要なことである、といふのは今茲に記した原理に依れば該理論は常に完全な社會經濟、貨幣形態の下に於ける經濟生活の諸實在竝びに社會經濟の諸現象及び諸關係の必然性の程度如何等の研究に向けられてゐるからである。唯斯くの如き理論のみが通常「社會問題」と呼ばれる複雜な諸問題の明瞭な概念を獲る助けとなり得るのである。

經濟理論の斯くの如き目的は既にその方法に關する貴重な一般的目標を提供してゐる。とはいふものゝ、方法の問題、竝びに方法の選擇を左右すべき原理の問題は尙ほ一層精密な分析を必要とする。吾人は方法の選擇に於いてさえ或る必然的要素が存すること、又少くともこの選擇は決して從來我が經濟學に於いて往々なされた如く全く任意に決定されるやうなものでないことを見出すであらう、從來は殆んど凡ゆる論者が彼れ自身の特徴と彼れ自身の定義とを作り上げ、而して彼れ自身の問題處理法を見出さねばならぬと信じてゐたのである。かゝる狀態の下に於いては偶然な見界が分不相應に大きい役割を演ずるに至り、その結果經濟學に於いて、無政府狀態とも謂ふべき悲しむべき不統一を招來し、若き學徒をして直ぐさま絶望狀態に陷らしめたのであるが、斯くの如きは他の如何なる實際的科學にもその比を見出し得ざる所である。若し人々が經濟學の方法の選擇に於いては「經濟的」考慮が決定的の力を持つべきであるといふことを觀さえすれば既に遙に好い狀態となつてゐたであらう。こは非常に單純な法則の如く見えるだらうが併しそれにも拘らず極めて一般的に看過せられ、而して總べての日常の論說は勿論、經濟學に關する多くの重要な議論が、往々にして經濟的見界に對する關係よりも

寧ろ技術的見界やその他の無關係な見解に對する關係の爲めに影響せられてゐたのである。

我々は先づ經濟學の採るべき一般的方法を觀よう。事物の本質的な性質中に斯る方法を決定する何物かゞ存するであらうか。我が經濟學の對象は或る社會的單位の經濟に在る。この經濟の性質はその過程を制約する社會的秩序の爲に或る程度まで影響せられるが、それは又或る程度に於いてこの要素とは無關係である。私が既に述べた如く、經濟學の本質的な一つの任務はこの無關係の程度を明かにし、その研究の各階段に於いて、その結論の眞に妥當性如何を示すに在る。

この目的の爲め吾人は常に、吾人の基礎的研究に於いて必ず「社會組織竝に社會制度に關する假定の最少限度」を設けなければならない。然る時は吾人の得たる結果はそが實際に有する所の完全な妥當性を具ふるに至るであらう。全く、經濟的研究の最初の階段に於いて、我々は社會的秩序に關して全然何等の假定をも置かないであらう。然る時我々は、凡ゆる社會經濟に對して外的條件とは無關係に一般的に妥當する結論に到達するであらう。かゝる結論は明かに經濟的必然性の核心を表現するであらう。若しも我々が更に進んで現時の經濟狀態に近づかんと欲するならば、社會的秩序に關するより特殊な假定を設けることが必要となるであらう。これ等の諸階段中就中最も重要なるは交換經濟卽ち、一般に各家族がそれ自らの爲めに生產せずして、全社會の爲めに生產し、而してその生產物若くは勞務を自ら必要とする物と規則的に交換する所の社會的秩序の假定である。然る時はこの經濟に特有な新現象の全系列が考

慮の中に入り來ることゝなり、先づ第一に價格現象竝びに價格決定の全過程が考慮に上るであらう。從つて、我々の研究の結果より狹い妥當性を有することゝなるであらう。更に進んで產業の私的管理、生產手段の私有若くは自由競爭制度といふが如き假定が置かるゝに及んでは、この妥當性は尙ほ一層局限せらるゝであらう。重要なのは問題となれる研究の性質に關して必要以上の假定を決して設けることのないやうに注意し研究の如何なる階段に於いても我々の得た結果が決して必要以上に局限されることなからしめることである。このことたるや、若しも我々の得た結果がその妥當性の一部を不必要に失ふやうなことがあれば、眞理の一部も亦失はれ、或る種の觀點からするときは我々に取つて實に最大の興味を有する部分までも或は喪失されるが如き結果となるが故に重要なのである。

この法則を遵奉するときは經濟的條件が如何なる程度まで社會的秩序の勝手な改造と無關係であるかを決定することが出來る。實際科學は唯この方法に依つてのみ通俗的な政治的勢力の過大視を有效に反駁し得るのである。のみならず斯くの如き社會經濟の研究は亦、そが重要な經濟的現象の本質に深く徹する一助たるものであるが故に、科學それ自體に取つても大いに重要である。

時としては全生產が單一な權力の掌中に集中されてゐるとの假定の上に立つ純粹な社會主義的社會に於いて我々の實際的經濟生活の或る特徵が如何なる形態を採るか、又それ等の現象が如何なる制限を受けるかを考察するのも有益なことである。斯くの如き研究の結果社會秩序の根本

的改造が本質的經濟的現象に及ぼす效果に對して獨斷的社會主義者の懷いてゐる信仰が全く根據なきものであり、事實上政治的勢力の迷信的過大視を表はすに過ぎぬことが明かとなる。同時に斯くの如き研究は吾人の社會經濟の本質的な諸方面に新な光明を投ずるに恰好なものである。といふのは、或る種の立脚地からするときは、假定の上に立つ社會主義的社會は理論上單純な交換經濟の形態であるとも見做すことが出來、從つて、斯くの如き假定經濟の理論的分析は現存經濟の實際的諸問題を闡明するに就いて或は貴重な助けともなるからである。『クルーソー經濟學』*に就いては以上述べた所と同じやうに言つて退ける譯には行かない尤もこれに對しては從來不必要な注意が拂はれてゐたのである。何んとなれば吾人の觀る所を以てすれば、經濟は一個の本質的に社會的な過程

* Crusoe economics

であり、從つて經濟學も亦孤立人の經濟を研究して學び獲る所殆んど皆無だからである。

外的條件に關する假定に就いては以上に止める。それ自身の對象に關して、經濟學も勿論、理論的研究に於いて一般に見る如く、最も單純な從つて最も抽象的な事例から一層複雜且つ具體的な事例に進んで行かなければならない。その進み方も勝手に選ばるべきではなく、大體に於いて研究對象たる實在の本質的性質に依つて決定せられるのである。事實上、特殊な研究範圍に於いて事物を複雜化せしむるものゝ何たるかを知るや否や、單純なる物から複雜なる物への進み方も決定せられるのである。扨て經濟生活の主たるそして最も一般的な複雜性は疑もなくその不斷の變動性から發生するのである。斯くの如き次第であるから、抽象的

事象から具體的事象への推移に於ける繼續的階段は大體に於いて既に經濟理論の爲めに膳立せられて居るのである。第一の階段では變動性を全然除外しなければならないから、從つて純粹な「靜的經濟*」を我々の研究對象としなければならない。第二の階段では靜態に於ても扱ひ得るやうな動的條件を導き入れることが出來る、換言すれば「劃一的に進歩する經濟**」を研究しなければならない。之れを『準靜的階段』と稱してもよいであらう。第三の階段では本來「經濟動學***」とも稱すべきものを研究する運びとなる。

この順序は、經濟學の對象の性質から生ずる論理的結果であるから、その各階段に於いて別々の方法を用ふことが必要となる。第一と第二の階段に在つては明かに純粹な演繹法が必要である。何んとなればこの階段に於いて我々の出發點となる假定は抽象的であつて、實在の世界に於いては斯くの如き階段を觀察し得ないからである。併しながら、動學に來るや否や、問題は別な姿を採る、何んとなれば茲に至つて我々は實生活が劃一的展開――これは我々が既に先きの階段に於いて研究した所である――に對して示す所のデヴィエーションを研究しなければならないからである。これは明かに、斯るデヴィエーションを見出し且つ記錄し而して又事實を適當に分類することに依りデヴィエーションの原因を闡明せんとする歸納法の助けを藉りて後始めて可能である。

經濟學に於いて、景氣の循環に關する章が事物の本性に依つて制約された歸納的研究方法の最も典型的な實例を成してゐる。私の「社會經濟の理論」に於いて、私の景氣循環に關する部分では勿論純粹な歸納法を

* Static Economy.

** Uniformly Progressive Economy.

*** Economic Dynamics.

用ひ、これに由つて統計的數字を蒐集配列し以つて產業制度の決定的勝利から大戰の勃發に至る期間に於いて常に發生してゐた所の、劃一的進歩に對する最も典型的なデヴィエーションを闡明せんとした。批評家の或る者は靜的玆びに準靜的階段を取扱へる同書の前半を支配する演繹法を私が突然捨てゝ斯くの如く方法に變更したことを非難した。併しこの變更は決して勝手にやつたのではない。反對に、靜的研究から動的研究へ移つた爲め必然的にさうしなければならなかつたのである。

靜的經濟竝びに劃一的に進歩する經濟の假定はそれ自體の中に必然性の要素を有してゐる。このことは靜的經濟の場合に明瞭である。進歩的經濟の觀念を出來る限り單純化する必要上必然に劃一的に進歩する經濟を點檢しなければならなくなる。例へば資本の社會的蓄積といふが如き經濟生活の本質的特徵は唯進歩的經濟にのみ存する、併しながら劃一的進歩の假定から出發するにあらざればその明瞭な觀念を獲ることは不可能である。尙ほ進んで純粹な動的條件を研究するに當つても亦、實際上の經濟條件の下に於いて起る變動の比較の標準として劃一的進歩を考へることが必要である。斯くの如き標準を有するならばこれ等の變動は劃一的進歩を表現する正常的曲線からのデヴィエーションたる性質を帶びる。以上の觀察の結果更に動的經濟を研究せんとするには何故に常に劃一的進歩の點檢が絕對的に缺くべからざるものであるかゞ直ちに明かとなる。

併し玆に記述された單純化の爲めの假定は又大體に於いて充分なのである、卽ちその他の一般的單純化は何等の必要もないのである。故にそ

の他の一般的單純化、例へば貨幣なしで而かも商品の規則的交換が行はるゝ社會經濟といつた樣な普通よく爲される所の假定を設ける必要がないのである。加之この單純化は不必要なばかりでなく全く誤れるものである。貨幣なる要素を除外すれば我々の實際的經濟の複雜な現象をもつと單純な形で表現することが不能であらうとなす觀念が經濟理論をして普通一般の教科書中に於いて、價格論の序論と見做されて居る所の、特殊な價値理論を構成せしめるに至つたのである。私は本講演に於いてこの進み方が不必要であり從つて又時間の浪費であるばかりでなく、本質的に誤りであるといふことを示さうと思ふ、何んとなれば數量的に言ひ表はされた價値理論は常にそして必然的に少くとも計算の單位として、暗默の中に貨幣の存在を豫想する所の價値論であるからである。

經濟生活の本質的な一特徴はそれが常に繼續せられ從つて始めもなければ終りもないといふことに在る。その結果經濟學は「永續的經濟*」特に永續的生產過程をその對象としなければならない。凭ういふ觀察は經濟理論の最も重要なる中心問題の概念並びにこれ等の問題を檢討する爲めに選ばるべき方法の上に決定的な力を有つてゐる。商品の生產を單に始めから終りまで記述するに過ぎなかつた所の初期の方法は、經濟的見解に據らずして技術的見解に據つて構成せられたのである。斯くの如き研究に在つては經濟生活の最も本質的な多くの特徴を理解することが根本的に不可能であつた。このことは先づ第一に、常に繼續せられて居る社會經濟の特徴と見做されることに於いて始めて社會經濟的・永續的過程として把握され得る所の貯蓄の過程、並びに具體的資本形成の過程に

* perpetual economy.

就いて當て嵌まる。この見解に照して考へるとき貯蓄は後に至つて消費さるべき財貨を貯へることであるといふその古い意味を失ふ。繼續的經濟に於いて貯蓄せられるものは決して生産されないのである。然るときは貯蓄は單により眞實な資本を構成する爲め自由に用ひらるゝに至る生産要素の解放を意味するだけである。斯くの如くにしてこの繼續的過程としての資本の構成の可能性は直ちにその眞當の説明を與へられるのである。

繼續的經濟の考へは利子理論の上にも亦新なる光明を點ずる。それは資本に對する利子を、始めも終りもある一つの孤立した取引の一要素として、或は「未來財貨と現在財貨との交換に於いて支拂はるゝ打歩」としてゞはなく、繼續的經濟の進歩の割合と最も密接な關係に立ち、而して或る程度の貯蓄を維持し又利用し得べき貯蓄に對する需要を制限する所の、繼續的經濟の調整者としてこれを考ふることを得せしめる。

我々は常に完全な社會經濟を研究の主題とすべきであるといふ原理が如何に意味深重であるかはこれ等の總べての例に於いて明瞭に示されてゐる。實に、繼續的經濟を檢討するの必要を生ずるのもこの一般的原理の結果に過ぎないのである。何んとなれば社會經濟は繼續的存在を有し、その埒内に於いて行はるゝ特殊な取引の有する一時的性質とは無關係であるからである。

これ等の研究上の原理と、靜的階段から劃一的進歩なる準靜的階段へ、而して最後に動的階段へと進み行く原理とを結合するとき、吾人は繼續的に靜止せる經濟――其處では凡ゆるものが不變であり而して經濟理論

の最も基礎的な諸概念を最も單純な方法で定義する最良の機會が存する——から劃一的進歩を伴ふ繼續的經濟——其處では特に貯蓄並に資本の蓄積なる新概念が入り來り而してこれが絶對的に不變な現象として研究せられ得る——へ推し進むといふ全研究系列に到達するのである。これ等の階段を通過したる後、始めて動的階段を研究すべき充分の準備が整ふのである。而してこの階段に於いて吾人は等しく繼續的經濟を研究するのである。寔に、景氣の循環に關する問題の全體は繼續的經濟の發達と該經濟の内部的諸關係とに於ける若干の變動の問題として研究され得べく又研究されるべきである。

私は茲に研究の順序に就いて唯簡單な暗示を與へることしか出來なかつた。併しながら私はこれに依り經濟理論に取つてはその方法を任意的でなく又偶然的見解に影響されることなく、意識的に而して經濟生活自體の本質及びこれ等の本質が經濟理論の進め方に對して必然的に有する要求を固く遵奉しつゝ選擇することが如何に根本的に重要であるかを明瞭ならしめたことゝ思ふ。

經濟學は本質的に「數量的」である。從つて我々は常に經濟生活中注意に値する凡ゆるものゝ數量的概念を得るやうにしなければならぬ。從つて、よく經濟學を習得せんとする基礎的要件は數量的に考へる習慣を作り、又凡ゆるものを數字で表はす習慣を作ることにある。實際經濟學は論議の渦中に在る諸概念を數量的に確定することをしなかつた爲め酷く損をした。世の著述家なる者は動もすれば曖昧なる字句でその見解を表現するを以つて事足れりとしてゐるが、併し彼等はこれに依つてその

無能なることを曝露するばかりでなく何物をも明瞭ならしめ得ないのである。時としては何か極端に大きなものゝ印象を與へ、而してそれに依つて讀者に或る考へを强ひて押し付ける爲め强い言葉が用ひられることがある。これは決して眞に科學的な遣り方ではない。我々は假令極めて概算的なものにもせよ、能ふ限り實際の數字に立脚して經濟學上の推論を爲すやうに努めなければならない。見積りの數字或は又假定的數字ですら全然これを缺くに勝る、何んとなればそは吾人の思想を確立せしむる一助ともなり、又問題中に入り來る他の數量に關して吾人の設定する諸假定を一致せしめ、以つて全然誤れる結論を抽き出すが如きことなからしめるからである。又數字に依る評價は考慮の中に入れるべき種々の要素の相對的重要性の觀念を得るが爲めに必要である。經濟學に於いては數量的關係が最も重要である、そして若しも數量的尺度に依り本質的要素と非本質的要素とを辨別することが出來ないならば、我々は動もすれば重大な間違ひをなすべく、又價値ある結果に達すべき大した望みもなくなる。

或る一つの結果に對して數個の原因が存し而して我々がこれ等の原因を說明しなければならぬやうな場合が屢々あるが、このやうな場合經濟學に於いては數量的考へ方が如何に有用であるかといふ善い實例が與へられる。勿論斯ることは各個の原因を數量的に觀念し得る時始めて可能なのである。處がこのことは極めて屢々全然閑却されてゐる。或る人々は各原因間に何等の差別をも認めず、又それ等が如何樣に共働するかの問題に對しても何等の注意を拂ふことなく、唯好んで出來るだけ多くの

原因を列擧したがる。然るときは直ぐ原因の過剰を來たし、而して若しこれ等の原因を全部考慮の中に入れる時は、我々の說明すべき眞の結果より遙かに大きな結果の說明となるであらう！

共働して或る一つの結果を生ずる所の種々な原因を分析する一般的方法は次の如くである。我々は先づ最も本質的な原因を見出さねばならない。次いで結果の全體からこれ等本質的原因の共同的效果を捨象しなければならない。斯くの如くする時は未だ說明されずに居る部分は極く僅かとなり而して更に進んで研究すべき範圍も明かとなる。時としてはこれ以上一歩も進み得ない場合もあらうが、併し多くの場合更にそれ以上の研究と雖もこの研究範圍の限定と而して次の如き事實、卽ち未知の小要素が今や既知の本質的要素に對する關係に於いて考察され得るといふ事實とに依つて著しく容易にせられる。所謂貨幣數量說*なる手近な實例はこの事を明かに示す。一社會に於いて必要とされる貨幣の數量は明かに先づ交換さるべき財貨の數量と一般的物價水準とに依存し、そして一般にこれ等の要素の成果と或る比例を保つてゐる。他の要素がこの問題中に入り來ることも亦有り得る。併しながら若しも我々が數量說に依つて先づ本質的要素並びにその共同的效果を該問題から引離すならば、これ等他の要素の分析が容易にせらるだけで決して妨げられるやうなことはないであらう。數量說の反對者は實際の數字と同說の理論とが一致しないやうに思はれる場合を擧げて痛快がるのである。而して斯る場合を數量說信者がどう說明するかを見るのは大いに興味あることだといつて彼等は得意氣に絕叫する！　處が、事實上、斯くの如き場合には反對論

* Quantitative Theory of Money.

者の說明を見るのこそ遙かに興味津々たるものがあるであらう。何んとなれば數量說を採るに於いて初めて可能な本質的要素の最初の分離に依つて明かにされた難點の精密な分析に至るべき術を彼等は持たないであらうから。

經濟理論に於て數量的方法の有用なることを示すべき實例を長々と引用するのは困難なことではない。玆では私は唯この外に特に重要な二つの場合を指摘するに止めねばならぬ。先づ第一に、純粹質的な利子理論は殆んど全く無價値である。我々は啻に利子が何故に存在するかを知らんと欲するのみならず、何故に利率が現在の如き高さになるかをも知らんと欲する。利率が五厘であらうと五分であらうと、同じことだとして了うやうな理論は、結局に於いて、決して眞實の利子理論ではなく、殊

欠

した」といふが如きこれである。去りながら、この方法では全く自然的な該問題をすら、明瞭に分析することが到底不可能であつた、何んとなれば「供給過剰」とか「供給過少」とか、或はこれと同様な表現法に依つて一體如何なることが意味せられて居るのか誰も知ることが出來なかつたからである。唯該期間中は物價の變動を來すことなき供給の劃一的增加を表はす所の、或る期間に於ける正常的な金の供給曲線が描かれた時始めて、各個の年に於ける金の供給が正常的であつたとか或は變則であつたとかいふことが出來るのであり、而して若し變則であつたとすれば、その供給の正常的狀態からのデヴイエーションを明確に計量することが出來るのである。唯このデヴイエーションのみが金物價の一般的水準に何等かの影響を及ぼし得るのであるから、この問題に於いては數量

欠

的方法を嚴格に適用する時にのみ何等かの明確な結果に達することが出來るのだといふことが直ちに明かとなる。

このことは他の動態上の問題、從つて先づ第一に景氣循環の問題に關しても同樣である。先づ劃一的發展を檢討せずしてこの非劃一的進步の概念を得やうとしてもそれは不可能である。さて劃一的進步の第一の特徵は資本の增殖の劃一的なことに在る。かゝる觀察は既に景氣循環現象の本質的特徵卽ち資本構成部分の量的變化を分析する端緒を提供してゐる。數量的方法を適用し以つてこれ等の變化を計量し始めない以上、吾人は景氣循環運動に於いて共働して居る各種の要素を明確ならしめ得る望みは殆んどないのである。

多くの實際問題に於いて、近代的國家に取つては正常的と見做され得べき進步の割合について何等かの觀念を有することが必要である。事實上、性質的推論に於いて斯くの如き觀念が度々用ひられる。例へば人々が非常なる『緩漫な發展*』といひ或は『異常なる繁榮と進步**』との時代といふが如き卽ちこれである。私は統計的に研究した結果、西部歐羅巴の國に取つては、大戰前の半世紀間に於いて、一ヶ年三パーセント或は僅かにこれを超ゆる割合の進步が正常的と見做され得るといふ結論に達した。この評價は吾人をして進步的經濟の本質的諸關係、特に貯蓄と資本の增殖に關して明確な數量的觀念を得せしめる。勿論、前述の數字に對し而して又進步の割合なる概念自體の的確な意味に對してさへ反對論が在り得る。併しそれにも拘らず、絕えず論議の的となる事柄に就いて數量的な或る觀念を有つといふことは全く曖昧な章句に頼るより遙かに

* slow development.

* * unusual prosperity and progess.

ましである。

最後に、經濟學に於ける「定義」の立て方に就いて少し注意して見やう。この點に於いても亦、勝手氣儘な遣り方と非經濟的見解の影響とが有害な結果を來したのである。實際、我經濟學は、概念と術語との決定に就いて、殆んど全く無政府狀態とも稱すべき分裂狀態に苦しんで居る。この悲しむべき狀態から遁れ出る唯一の方法は、經濟學の特徴と定義は經濟生活に本質的な實在に依つて決定せらるべきであるといふ原理を嚴格に遵奉するに在る。煩鎖哲學*は形式的定義が凡ゆる科學への通路を成すべきたと要求した。然るときは定義はアプリオリ**に作られなければならぬことゝなり、斯くて不可避的に自由裁量と無關係な見解とに委せら

* Scholasticism.

** a priori.

るゝ所大なるものがあつた。斯くの如き觀念は近代の科學的考へ方とは全然相容れない。吾人は該名稱を擔ふべき事物が明確に理解されない內は決して名稱を用ひてゐてはならない。故に第一の仕事は經濟生活の事實竝に關係に於いて本質的なものを分析するに在る。この事が明かにならない限り吾人は經濟的本質に一致する特徴を抽出し得ない、そしてこれ等の特徴を明かにした時始めて定義を導き入るべきである。例へば資本なる概念はアプリオリに導き入れらるべきではない。何んとなれば、經驗の示す限り、斯る場合には完全な自由裁量がこの概念の範圍と意味とを支配するといふことは避くべからざる所だからである。我々は必然的に資本なる概念を導き入れしめた經濟的實在の檢討から始めねばならない。そして我々は只今言及した所の靜態經濟竝に劃一的進步的經濟な

る二つの基礎的單純化を用ひさへすれば全く明瞭な方法でこれを爲し得るのである。*

勿論、經濟學の如き實際的科學の用語が實生活のそれと能ふ限り一致するのは望ましいことである。とはいへ、公衆の間に行はれて居る曖昧で不定な經濟上の觀念は、往々にして誤謬と矛盾を含む曖昧で不定な用語に反映せられて居る。故に、經濟學は實業界並びに大衆の用語と能ふ限り密接な關係を保つやうにしなければならぬけれども、又それ自身の特徴を利用しそしてその術語に一層明確な意味を持たしめない譯には行かぬ。

私は茲に經濟理論の目的と方法とに就いて述ぶるに當つて是非共言はなければならないと思はるゝことを詳說せんと努めた。これ等の目的と方法とは經濟理論の大問題を取扱ふに就いて極めて貴重な道しるべを供する。私は引續き行はるべき講演に於いて、茲に述べられた方法に從つてこれ等の問題を檢討した主要なる結果若干を提供しようと思ふ。

* 社會經濟學の理論、5,6頁

第二章　價格論としての經濟學

經濟理論の說明に當つて別個の價値論が價格論に先行すべきだと言ふ觀念が從來極めて廣く行はれて來た。唯斯くの如くしてのみ眞に徹底した經濟學の分析が可能であると考へられてゐた如くである。學生は是非とも先づ、貨幣の概念が除外されそして最も錯雜した經濟問題でも恰も人類社會が未だ貨幣の使用法を知らないかの如くにして取扱はれねばならぬ所の經濟學上の階段に透徹しなければならないと見做された。可哀相に學生は、勿論出來る丈け早く進んで自分自身の經驗から知り得た經濟生活の實際を研究したいと熱心に思つても、長い間左樣な望みを斷念しなければならなかつた。その間彼れは、明瞭な數量的問題に關する推

論を進める樣に訓練されたのである。いふ迄もなく彼れは何故夙に缺くべからざるものと思ひなしてゐた價値の測定法を奪はれなければならぬかを解するに苦しんだ。

私自身としても、最初經濟學の研究を始めた時この困難が全く堪へ難いものであつたことを告白しなければならない。想ふに是は、一部分は私が一般に單純化を好むことから由來し、又、一部分は數學家としての私の初期の教育が科學的思考の根本的數學的基礎を正確に把握すべきことを教へたといふ事實から由來するのである。故に私は最初から熱心に果して吾人は斯くの如き價値論を通過すべき必要があるかどうか、或は直接に價格論に入ることが可能ではなからうかと云ふことを窃かに問うて見るに至つた。私の答は、直接に價格論を築き上げることが可能である、そして恐らく普通の價値論に依つて探究され得べき如何に重要な眞理と雖もこの價値論を省略した爲めに必ずしも失はれるものではないといふに在つた。或る意味に於いて、その後の私の全科學事業は、別個の價値論を用ひずして直接に價格論を建設することに捧げられ、又經濟理論を斯くの如き方法で基礎付けた結果を明かにすることに捧げられたのである。*社會經濟の理論を私は次にもつと詳細にこの事業に導かれて行つた動機の説明を試みるであらう。

私の考へでは、先づ第一に、經濟學はその方法に於いて經濟的たるべく、そして本質的結果の獲得に要する勞力を節約する點に於いて實に他の總べての科學に對して模範となるべきである。若しも困難な價値論を拔きにすることが出來、又學生が明瞭な價格論を通してもつと便利に實

* 社會經濟の理論，7頁

際に重要な經濟問題を研究し得るとすれば、この勞力節約の目的を達成することこそ經濟學の第一の任務である。

更に、大抵の教科書なり教室なりで説かれてゐる價値論には重大な缺點があると言ふことは容易に看取された。その合理論は『價値』なる概念が曖昧な爲に困難した、『使用價値*』とか『交換價値**』とか言ふが如き語句は吾人の常に見るその實例である。事實上價値とは常に或る狀態の下で支拂はるゝ價格を意味するのである。その狀態が隨意に變更され得るに隨つて價値の概念も亦種々に構成され得るのであり、そして全く事實上にも極めて多樣に構成されて來た、そして造詣の深い經濟者に取つても之が研究は困難であり若き學徒に取つてはこの上もなく譯の解らぬものであつた。

* value in use.
* * value in exchange.

その最も基礎的な諸概念に就いて一般的一致に到達出來ないと云ふことは決して科學の信用を保つ所以ではない。斯かる理由からしてその根本的概念中に價値を包有しないで一の經濟理論を樹立することが可能であるといふことは極めて望ましいことゝ考へられた。仔細に吟味した結果、通常説かれてゐる價値論がその研究すべき數量を測定するに確定的單位を缺く爲め如何に困難したかゞ明かにされた時、この議論は大いに强められた。一物の價値が、ジョン・スチユアート・ミル*の語法に從つて、『その所有が一般に購買し得べき商品に對して附與する支配なり』として叙述される場合に、かゝる概念は數學的明瞭と確實とを必要とする根本的理論の基礎としては非常に不適當なことが認められねばならぬ。

所謂『主觀的價値學説**』が現はれて價値は人類の慾望を基礎とすること

* John Stuart Mill.
* * subjective theory of value.

とを主張するに及んで、もつと確定した數量的概念の必要が最早や閑却され得ざるに至つた。效用が基礎的な數量的概念として導き入れられ而して效用の程度が數字や圖形に依つて表示された。經濟理論の全體が斯くの如き基礎の上に樹立さるべきであるには相違ないが、今や經濟學中に採り入れられた種々なる數量を測定する爲めの確定的單位が必要となつたと言ふことに就いて一般的に殆んど何等の注意も拂はれなかつた。近代の高等數學に於いては根本的な總べての數の系列の算術的基礎が極めて本質的なものと見做されて居る。經濟學も依つて以つてその考察しつゝある數量を測定せんとする單位を確定するに就いて是と同樣の注意を怠る譯には行かぬ。この基礎的な點が少しでも曖昧であれば、その學說の到達した結果の說明が非常に不確實となるに至るであらう。例へば若し理論的研究が、效用の最大限が或る狀態の下で到達されるといふことを示すならば、この結果の意味は效用が計量さるべき方法に本質的に依存することになる。この點に於いて價格の概念は遙かに價値の概念に優る。何んとなれば價格は貨幣單位で計られそして常に確定的數字を以て表示され得るからである。この事實は價格理論の全體を明瞭且つ確定的ならしめ、以つて價格理論をして經濟理論全體への最初の手引として又その究極的基礎として極めて適當なものたらしめる。

若し最初からそれ自體の本質的對象に向つて細心の注意を拂ひ、そしてその方法並びにその全行程を該對象の性質に依つて決定することを怠るならば、經濟學は極めて容易に誤つた方向へ逸れてしまふ。若し任意に或る概念を選擇しこの概念の探究を以つて經濟學の目的とする時は、

我々の研究は、非常に一面的なものとなつて必ず支障を來し、斯くて我々は我々の科學の對象に取つて實際には重要でない所の錯雜した議論の渦中に投ずる危險がある。

アダム・スミス*及び彼れの祖述者達は諸國民の「富」の性質と原因とを研究することを選んだ、そしてこの勝手な研究對象の選擇の爲めに疑ひもなく不當に富を重要視し、爲めに今や吾人が一面的であり且つ誤解の元であるといふことを發見する所の判斷や陳述をなすに至つた。同樣の遣り方で後の學派は「價値」の概念を勝手に選びそしてこの概念の分析にこびり付いてしまつた。この語それ自體が必然的に多少曖昧でありそして實際の用法に於いて多少變つた意味に用ひられて居るから、その科學的分析は非常な困難を伴ひ、そして多大の時間を費して種々なる價値

* Adam Smith.

の概念を分類し定義し、又この語の眞の意味に就いて言葉の末に囚はれた議論までしなければならなかつた。以上の如き場合に於いては我々の科學が誤つた道を辿つたといふことはこの上もなく明かだと思はれる。私が最初の講演で說明したやうに、經濟學の本質的對象は經濟生活である。だから若し一番初めから我々の努力をこの經濟生活の描寫に向けるならば、我々は我々の進み方に就いて最良の道しるべを得るだらう。果して然らば、實生活の通り貨幣形態の交換經濟を研究するのが至つて當然であらう、從つて貨幣單位を用ひないで先づ別個の價値論を立てゝかゝるのは非常に不自然で迂遠な遣り方のやうに思はれるであらう。

何故斯くの如き進み方が教授上必要と見做されて來たのであるかといふ質問の出るのは誠に尤もな話である。この質問に對する解答は直ちに

價値論の地位の全體の上に一層明かな光明を點ずるであらう。第一に、人々は勿論、經濟學上の論說の初めから複雜な貨幣論の全體を採り入れることは避くべきであると考へてゐた。從つて彼等は、經濟學の基礎的說明に於いては貨幣を拔きにすることをその義務であると考へた。若しも、經濟學の根本義の說明に於いては、貨幣單位の存在を假定するに先つて、本當に貨幣論全體を研究し盡す必要があるならば、この議論は確かに相當重大でもあらう。併しながら私が直ぐ示すであらう如く事態は決して左樣に不利ではない。

別個の價値論から出發する今一つの動機は、貨幣なしに財貨の交換が行はれた所の原始的社會が、總べての交換の基礎として貨幣制度を有つてゐる所の近代社會に先つて存在したとの觀念から生じたものである。

我々の理論的說明に於いてはこの社會的發達の順序に隨ふべきだといふことが多少意識的に考へられた。原始的社會の狀態は最も單純な場合を表現するものであるから、貨幣を伴ふ複雜な社會に檢討の歩を進めるに先つて、先づ研究さるべきであると信じられた。又恐らくは、斯くの如き原始的狀態を研究する時は、我々の注意を直ちに近代社會の貨幣經濟に向ける場合に分析されぬ虞れのある經濟的要素に透徹し得るといふ風にも考へられたのであらう。

貨幣形態の背後に價値の或る特質が隱されてあつて、貨幣と無關係に價値を研究する時始めて之を發見し得るのだと想像されたのである。例へば、ミルの如きは、總ての物價が同時に騰貴することは有り得るが、價値の一般的騰貴は論理的に不可能であるといふことを强調した。斯く

の如き論據に依つて、價値は價格の概念を導き入れる前にそれ自體として研究せらるべきだとされたのである。

以上の如き考へ方は或る意味に於いて、我々の基礎的研究に於いては常に社會組織並に社會制度に關する假定の最小限を設けるべきであるといふ一般的法則に一致すると言ひ得るかも知れない。私が最初の講演で言つた如く、若しも我々がこの法則を遵守するならば、我々の到達する諸結果は『それ等が實際に有する妥當性を完全に具備する』であらう。とは云へ、我々は交換經濟の檢討に立ち入るまでは數學的概念としての價値を論ずべき何等の理由をも有たないのである。併し我々が之を始めるや否や、必然的に我々の研究對象は貨幣を伴ふ社會となる、或は少くとも價値を計量する貨幣單位を有する社會となる。故に貨幣單位を假定しても、決して我々の得た結果の妥當性を勝手に局限することにはならない。成る程、我々は原始人をその孤立經濟に於いて支配した所の心理的過程に於いてすら何等かの評價の形跡を認め得る。併しそれ等の形跡は交換經濟の研究には何等の目標をも提供しない、そして若しも我々が先づ第一に、貨幣單位で計算することに慣れた近代人の眞唯中に於いてこれ等の原始的な評價の過程に對應する過程を研究するならば、我々は遙かに良くこれ等の原始的評價過程を理解するであらう。

經濟生活が無貨幣の物々交換*の階段から貨幣經濟の階段へと發達したと考へるのは凡べて疑ひもなく本質的に誤りであつて『事物の自然的狀態』なる觀念等と同列に置かるべきものである。十八世紀にこの觀念が行はれ、爲めにロマンチックな魅力はあつても、歴史的事實とは極めて

* barter stage

懸け離れた非常に澤山の記述を生じた。我々が社會生活の理論に於いて久しい以前にルッソー*の『社會契約**』並に之に先行する社會の自然的狀態なる觀念を拋棄したと恰も同樣に、經濟學に於いても我々が經驗から知つてゐる貨幣經濟に先つて物々交換經濟が在つたといふ觀念を拋棄すべきである。貨幣は商品の規則的交換に慣れた社會に導き入れられ、そして該社會に依つて愼重に採用せられた新發明品である。反對に、我々の貨幣制度は我々の財貨交換の制度と步調を共にして發達せしめられたのである。成る程、我々は原始時代に於いては原始的な貨幣使用の形跡を認め得るに過ぎないが、併し又當時に於いては我々は唯原始的な財貨交換の慣習の形跡を見出すに過ぎないのである。確かに人類生活史には貨幣を使用しない財貨交換に正常的に依存した社會は決して存在しなかつたのである。*

吾人の知れる如き貨幣制度は、貨幣交換の發達の最初の階段に於いて感じ始めたに相違ない所の二種の異なる必要を滿足せんとする努力の結果なのである。これ等の必要の第一は、交換せられんとし或は然らざるも租稅や貢物の支拂に於けるが如く等價と見做されんとする財貨の價値を計量する爲めの尺度の必要である。若干量の異種の財貨の等價の觀念は極めて原始的な狀態にまで溯る、併しさうなると我々が算術的に評價と稱するものとの間には猶ほ遙かに隔りが存するに至る。順序を踏んで併し恐らくは非常に緩漫に、異種の物品が共通の標準として選ばれた或る物品の幾何單位の價値を有するといふ形式で斯くの如き等價を言ひ表はすのが便利であるといふことが解つて來た。去りながら、非常に貴重

* Roussenu.
* * Contrat social.

* 社會經濟の理論. 34頁

且つ耐久的な財貨はより貴重でなく且つ傷み易い財貨と交換され得ないといふ考へが一般に行はれたので、長い間異る等級の財貨に對して異種の標準が用ひられた。併し次第に斯る種々な標準が相互に連絡せられて價値を計量する爲めの完全な尺度を形成するに至つた。我々は近代文明中にこの發達の形跡を保有してゐる。例へば英國の價値計量の慣習では磅志片の三單位が行はれて居るが如き是である。とは云へ、人類社會は玆に描出された諸階段を通して、遂に總べての財貨の價値が計量され得べき一の價値單位の觀念に到達したのである。

この價値單位は常に層一層抽象的な單位となり而して元々、單位を表現した所の貨物との關係から離れんとする强い傾向を示して來た。例へば、干魚が單位として用ひられる時には、勿論該單位が或る平均的な大きさと品質とを有する魚を表現することが必要である。斯くて該單位が標準魚となり、從つて既に或る程度に於いて抽象的なものとなつた。この發達は、原始的狀態に於いてすら、屢々、使用されてゐる單位が全然抽象的な計算單位となり、又往々にして該單位に表示されてゐると想像された所の貨物より遙かに少い價値を表現するといふ樣な結果に導いた。或る場合に於いては本原的な單位の意味さへ忘れられた。これに對應する近代社會の貨幣單位の發達は紙幣史を知つてゐる者なら誰でもよく知つてゐる所である。

この發達の間に在て一般的交換手段の必要が層一層强く感ぜられた。原始的な物々交換制度がそが發達せしめた所の價値計量の尺度の助を藉りることに依つて行はれ得たものだといふことは想像し得る。併しなが

ら財貨交換の慣習は、人々が、各人がその提供すべき財貨に換へて取得し得る所の、一般的交換手段を有たない内は決してより廣くそしてより規則的にはなり得なかつたのである。使用さるゝに至つた交換手段は、屢々、價値單位として用ひられた物以外の物であつた。例へば、人々は單位としての牛を以つて計算することも出來やうけれども、交換手段としては金屬片を使用する。このことは、便利な交換手段としての必要品が往々にして良き價値標準としての必要品とは大いに異る所からして、全く自然的なことである。とは云ふものゝ、交換手段は必ず貨幣の尺度で量つた際には確定的な價値を有しなければならない。標準單位を以つてする交換手段の評價が傳統又は僧侶或は諸侯の統御に依つて固定されるやうになるに連れて、該單位を以て表現さるゝ實際上の價値は交換手段の價値、例へばその稀少性に依つて決定されるやうになつて來た。斯くの如くにしてそが元々表現した所の物からの貨幣單位の分離が完全となり、そして該單位はその後は純抽象的單位となつたのである。この單位の購買力は今や現存の貨幣の尺度に於ては支拂手段として認められてゐる物の供給の稀少性に依つて決定されたのである。この發達段階に在つては實際の貨幣制度が現はれたと言つてもよいであらう。

故に、吾人の有する近代貨幣制度は、價値單位及び交換手段といふ二つの根本的要求を滿足せんが爲めに財貨交換の慣習が極めて徐々に進歩して行く間に段々發達せしめられた二つの考察の統一なのである。

この貨幣の起源に關する分析に依つて、價値單位の使用が、財貨の交換が一般的に或る重要さを有つに至つて各社會に取つて、一つの根本的

要求であるといふことが感ぜられたことが明かとなる。果して然らば、經濟學に就いては之れと異る所があるべきだといふ何等の理由もない。我が經濟學が經濟生活の實際上の發達に依つて玆に與へられてゐる忠告を守ることが賢明な策であると私は考へる。斯くて、我々は交換經濟を研究せんと決するや否や、直ちに、總べての價値を計量し得る所の貨幣單位を導き入れなければならない。然るときは價値は價格となるであらう、從て我々は最早や別個の價値概念とは相關する所がないのである。我々は先づ價値論に苦しむといふやうなことなしに價格論の樹立に向つて進むことが出來る。」

眞に、重大問題が殘つてゐる、卽ち如何にして貨幣單位が一定せられるか、何がその購買力を決定するか、そして如何にしてこの單位の安定が保證され得るか。これ等の諸問題は吾人の經濟學研究の初めから答へることは出來ない。それ等は是非とも後に貨幣論を說明するまで延ばされなければならない。去りながら、我等の論議は既にこの貨幣論の本質的仕事の何物たるかを示したのである、卽ち貨幣論は如何にして抽象的な貨幣單位の購買力が決定せられるかを明かにしなければならない。

「我々は最初一般的經濟理論を說明するに當つて單に貨幣單位を一定不變なものと假定しなければならない。さうすれば我々の價格論を構成することが出來、そしてこの理論の結果は、平衡の狀態に在つては、總べての財貨の價格が決定されることになるのである。」とは云へ、該價格はそれ自體が未定の一單位を以つて決定されてゐるのだから、一般的理論に於いては財貨の價格は互に相對的に決定され得るに過ぎないといふこ

とが明かである。この事は財貨の價格が、未だ決定されずにゐる所の累積的要求以前に就いては、決定せられてゐることを意味する。この程度の未決定は一の價格を絶對的に決定することに依て除くことが出來る。これさえ濟めば直ちに總べての價格はその絶對的水準に於いて一定される。如何にすればこの物價の絶對的決定が可能であるかを説明することこそ正に貨幣の特殊の仕事なのである。從つてこれは一般的經濟理論を説明する際には素通りしなければならぬ問題である。後で貨幣論に來た時に、該論の對象を斯く確定的に豫め一定して置くことが非常に有利であることが解るであらう。支拂手段の稀少性が絶對的物價の決定に關して演ずる役目に就いて茲に爲した説明は、既に貨幣論全體が進むべき主なる道順を決定する。

一度一般的經濟理論の基礎的説明中に貨幣單位を導き入れることに決めた時は、我々はこの一般的理論の基礎に適合する貨幣論を構成しなければならない。貨幣論の全發展は出發點から一の論理的結論として生じ來るのである。私が段々に樹立して來た貨幣論、並びに最近の私の現時の貨幣革命に關する分析中に包含されてゐる諸結果に從つて、私が最初から價値論に關して採り而して既に私の最初の著述――一八九九年刊行「チューピンゲル・ツアイトシュリフト」中の「基礎的價格概論」*――に於いて述べられてゐる立脚點の必然的結論が存したのである。その後の私の貨幣論の發展中には任意的な何物もなく又他の著者から受けた影響の結果たる何物も有しない。「利子の性質並びに必然性」に關する私の著書――一九〇一年乃至一九〇二年に書かれ翌年發行された**――の讀者は次

*Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft チュービンゲン,1899.

**倫敦,マクミラン, 1903.

のことを想起するだらう、即ち同書は既に私が今特に述べたやうな貨幣論の本質的基礎を包含し、そしてこの貨幣論は既に經濟理論說明の全體系に不可缺の一分子として考へられてゐた。

「貨幣單位を有つや否や、我々はそれに依つて經濟學的分析の領域内に包まるゝ各財貨の評價を表現することが出來る。かくて價値の概念をばその儘にして置く所の經濟理論は、決してそのことの爲めに、恐らく別個の價値論に依つて探究され得るだらう所の評價過程の一部分なり特徴なりを除外することはない。實にその論議に眞に計數的な形態を賦與し斯くて例へば快苦とか效用とかいつたやうな何等かの計量上の單位を導入れたほど眞實に熱心にその仕事を行つた價値論は、そのやうな事實自體に於いて價値計算上の單位といふ意味に於ける貨幣單位を假定してを

り、從つて本質的には一の價格論であると謂ふべきだらう。故に、玆に概說された方法に對して、同方法を適用するときは必然的に評價の心理が閑却されることになるだらうといふ議論を以つて反駁を試みるのは無駄なことである。

勿論、吾人は單位自體の如何なる評價概念をも棄てなければならないけれどもこのことは唯形式的に重要であるといふに過ぎないのである。何んとなれば單位の可變的評價は、或る一定した單位を有する制度内では、一般的財貨に對して提供せらるゝ單位額に於いて反對の變化形式を取るであらうから。尙ほ又我々は決して單位自體に於いて起り得る變化を考へ得ない。我々は或る一定の單位を假定した、そして經濟理論の一般的論議に於いてこの假定を固守しなければならないのである。併しな

から我々はこの行程の爲めに何物をも見落すことはないのである。單位に於ける變化といふことの眞實の意味、從つて又或る一定單位を假定するといふことの眞實の意味は、唯貨幣論に依つて說明せらるべきものなのである。

「どのやうな評價の分析でも、吾人の體系に在つては、如何にして需要が價格に依存するかを、換言すれば價格の機能としての需要の顯現を描寫するといふ形式を採る*。されば、需要は、恰も價格と同じやうに明確な計數的概念であり、從つて所與の價格に於いて需要せられる商品の數量を表現する。評價に就いて言はれ得る凡ゆる事柄はこの機能の形式に依つてより明瞭且つ確定的に示される。而して猶もつと重要なことはこの機能の形式は、價格決定過程の主觀的方面卽ち需要方面に關して吾

*社會經濟の理論, 11頁

人の知るを要する總べてを成すのである。

去りながら、一商品に對する或る人の需要は、啻に該商品のみならず彼れの家計に於いて考慮に上る總べての他の商品の價格の機能なのである。事實上、或る人の財源使用方法は總べての價格が知れてゐる時にのみ決定せられ得るものである。とは云へ、一般に個々人は、所與の價格狀態に於ける財源使用方法に就いて判斷を爲し得るやうな地位にはゐない。實際上彼れは、總べての他の價格を不變の儘と假定した場合に、或る商品をその種々なる價格に於いて幾何買ひ得るだらうかといふことを明かにするに過ぎない。何となれば唯この假定の下に於いてのみ單位は彼れに取つて明確な意味を持つてゐるからである。人々が長い經驗に依り貨幣單位に對し取得し得る分量を熟知してゐるやうな公正な平衡狀態

に於いてのみ、彼等は、單一な價格が僅かばかり變動するとの假定の下に、その需要をどう變じようかといふことを何等かの確かさを以つて決定することが出來る。併し價格論に必要とせられるやうなこの種の需要の特徴の記述に取つても之れで十分である。何んとなれば、價格決定の要素を研究する最良方法は、平衡狀態の假定から出發しそして僅少の變化は或る特殊な價格に生ずるものと想像するに在る。吾人の所謂平衡狀態安定の條件は、この變化が反對の方向に於ける需要の變化なる形式で現はれる所の反動を喚起し、價格をして再び元の水準に落付しめるといふことに存するのである。』

斯くの如くにして價格論は唯需要の總べての異種財の價格に對する依存を表現する機能形態にのみ關することゝなる。斯かる需要の機能を考慮に入れるや否や、我々は又同時に或る物品に對する需要の增加――それは該品の價格の僅かばかりの減少に對應する――をも勘定に入れることゝなるのは自明の理である。事實上、我々が需要の伸縮性といふことを口にする時既に之れをやつてゐるのである。このことは唯機能形態の一層詳細な研究を意味するに過ぎない、そは凡ゆる人――假令基礎的な機能理論すら知らなくとも――の熟知せる研究である。從つて、この方法の經濟理論への適用が斯學に於ける一大發見なりとして賞讃せられたといふことは多少意外に思はれる。この發見の重要さは殊に主觀的價値學派に依つて强調せられた。この學派が效用を以つて價値の基礎たらしめんと努めた結果、『全部效用*』に對する『限界效用**』の概念を導き入れることが必要となつた、といふのは唯この限界效用のみが『交換價値』に

*total utility.
**marginal utility.

相當するからである。併しながらこの限界效用概念に認められた非常な重要さは大いに不自然であつた、又この重要さは同概念が『全部效用』――之れは全然形而上學的な概念であつて簡單直截な價格論に取つては全く何等の關係もないものである――に對して爲す對照に依存する所大なるものである。同學派が限界效用こそ交換價値の眞實なそして究極的な基礎であると宣言するに至りて、その眞實さと論理性とを共に失つてしまつた。何んとなれば、第一に、各方面の消費に於ける限界效用が價格に等しいといふのは全く嘘である。裕福な人に取つて限界效用は多くの方面の消費に於いて一般に大である。このことは次の事實に依つて明かである、卽ち彼れは、假令その價格が隨分高くても、猶ほ同じやうに澤山の商品を購買するであらう。併し次に、そして之れは遙かに重要なのであるが、假令限界效用と價格が一致する時でも、限界效用は價格の基礎として表現され得ない。何んとなれば我々は價格を知らない內は決して、或る物品の幾何が消費されるであらうか、從つて何處に限界が存するかを知らないから。斯樣なわけで、限界效用なる概念の上に滿足な價値論を樹立したといふ主觀學派の主張は斥けられねばならない、且つこの概念の重要度は、經濟理論が價格の一機能として需要を表現することに決するや否や本質的に知り得る所の諸關係に、側面から光明を投ずるといふ控へ目の希望にまで押し下げられなければならぬ。

上述の原理に基いて經濟理論は本質的に價格論となる。この價格論は必然的に物價決定の全過程を包括しなければならない。而してこの過程中には消費財貨の價格のみならず、中間的財貨並に生產の基礎的諸要素

の價格が包含されてゐるのである。人々の所得が生産に對する寄與の價格に依つて、決定されるやうに、經濟學に於いては『分配*』として知られてゐる所の全過程は、價格論中に包括されてゐる。次に、この理論は眞摯なる社會問題討究の眞の結構を提供する。人々が社會政策の立場から價値を口にするときに、彼等は實際には或る事物、例へば勞働が有すべき價格を意味してゐるのである。若し斯かる主張が多少確定的な意味を有つてゐるとすれば、問題の價格が價格決定の全過程の結果以外のものであるべき筈はない、そして、唯、この過程の爲めに、問題の價格が公正な高さに於いて決定されるに至るやうな狀態が創造せらるべきである。この觀察は社會政策一般に取つて大なる價値を有すべきである。何んとなればそは眞の進歩が遂げらるべき方法を示すからであり、同時に

*distribution.

又總べての種類の社會的實驗――これは本質的には特殊な價格をば價格決定の全過程が要求する所に反して決定せんとする一の試みに過ぎないのである――に對して愼重な警告として役立つからである。斯くの如くして價格論は又社會政策の良き道しるべともなるのである。

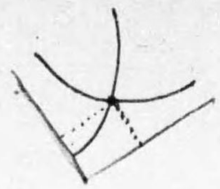
價格論を價値論に置き換へる利益は、資本利子論に到つて恐らく最も顯著であらう。* 若し我々がしつかりと價値論の立場を固守するならば、次の如きボエームバヴエルク** の公式に據つて利子現象の完全な說明を試みざるを得ざるに至るであらう、卽ち一般に將來財は現在財に比して低く評價せられ、而して利子は現在財と將來財との交換に於いて支拂はれる打步である。この形式に於いて利子論を構成することが論理的に不可能だとは或は言ひ得ないかも知れない。と言ふ譯は、或る意味に於いて

*利子の性質及び必然性、並びに社會經濟の理論、第五章參照。
**Boehm-Bawerk.

利子の支拂を包含する取引は現在財と將來財との交換を表現することは疑ひもなく眞實だから。けれども、果してこの説明の仕方は利益であるか、又果してそれは如何なる觀點からするも一般的價格論の結構中に自然と現はれて來る説明よりも優れてゐるかどうかといふことに就いては大いに疑ひの餘地がある。利子論が實生活に於いて利子の支拂にまで導く取引を能ふ限り眞實に反映するといふことは明かに極めて望ましいことである。斯かる立脚地からしてボエームバヴエルクの公式は極めて不自然なものと云はなければならない。

この公式に立脚して利子論を築き上げようとする時は、或は全然打ち勝ち難いといふ程ではない迄も不必要な困難に陷るに至る。私は實際には將來財に對する『一般的な過小評價*』が何等存しないといふことを特

*general undervaluation.



に茲に指摘しようと思ふ。富者は何等の利子が得られなくとも直ちに彼等の總べての富を消費してしもうものではないといふことは全く確かである。彼等は斯かる場合にさへ彼等の富の或る部分を將來の消費の爲めに貯蓄するであらう。實際彼等は彼等の富を將來の爲めに保有し得る可能性に對して假令『消極的利子*』を支拂はされてもさうするであらう。斯くの如き場合には將來財の過大評價が起るのである。之れに反して、何人も假令最高の利率を以つて報ひられてもその「總べての」現在財を將來財と交換しようとはせぬだらう。上述の如く將來財の過小評價は一個人の場合にさへ單一な數字を以て言ひ表すことが出來ないのである。從つて社會に於ける『平均的過小評價**』に就いて云々することも亦不可能である。事實上吾人の將來財に對する過小評價は、吾人の經濟的計畫

* negative interest.
* * average undervaluation.

の利率への依存といふ形式に於て始めて明瞭に敍述され得るのである。現在財と將來財との交換市場は或る利率に依つてのみ平衡狀態に置かれるのであり、そしてこの市場こそ正に利子論の第一の對象たるべきものである。問題を現在財と將來財との交換形式に押し込めるが故に斯くの如き研究が極めて困難にされたのであると言はざるを得ない。

利子を一の價格と見做すことに決め、從つて利子論が一般的價格論の不可缺な要素として取り入れられる時に、問題全體が遙かに自然的ともなり又理解し易くもなるのである。

斯かる目的の爲め先づ第一に何が利子の支拂を伴ふ生產の根本的要素であるかの問題を明かにすることが必要である。資本は、生產せられた物質財といふ意味に於いては――これ等の財貨自體が生產せられたものであるから――決して生產の根本的要素ではない。利子はこの資本使用の對價であると言へるかも知れない。併し果して然らば、如何にして資本自體の價格が決定されるかといふ疑問が起る。而して明かに利子問題は、如何にして資本使用の對價と資本自體の價格との割合が決定されるかとの疑問と一致する。この疑問に答へる爲め我々は經濟界の實際的慣行に依つて指示される方法に從はなければならない。我々は人々が或る金額を或る期間使用する權利の報酬として利子を支拂ふといふことを知つてゐる、だから科學的な分析は單にこの事實の上に建てられゝば好いのである。百磅一年間の使用が生產の根本的要素であり從つてこの要素に對して支拂はるゝ對價が利子なのである。この價格は例へば四磅二志六片であるとしよう、斯樣に英國の慣習に從へばそれは實際金額で言ひ

表はされる。

斯くて利子論は先づ何故抽象的資本を或る期間使用することが生産の必要々素であるかを説明しなければならない。この説明は我々の注意を實際的經濟生活の分析に向けるならば全く譯なく出來る。技術的意味に於ける生産には時間を要する、そして耐久的財貨の磨損には一般に遙かに多くの時間を必要とする。從つて生産要素の犧牲のときからこの犧牲に報酬の支拂はるゝときまでには時間が經過すべきである。この間それに相當する所の處分し得る貨幣額を有することが必要である。繼續的社會經濟は生産過程中に在る總べての物質財の總價値に相等する或る額の抽象的資本を有しなければならない。故にこの抽象的資本の繼續的處分が生産の一必要々素を成す。果して然らば社會主義的共産體に取つてもこの生産要素所有の必要なことが直ちに明瞭となるから特に如上の觀察を爲すことが有用である。

價格決定の一般的過程に於いて、この要素は他の生産の根本的要素と同じ理由に基いて價格を獲得する。私は次の講演に於いてこれ等の理由を説明しなければならないであらう、從つて茲では價格問題としての利子問題を眞實に理解することが特に重要な所以を多少述べるに止める。

總べての他の價格と同じく、利率が一定せられるとき、各人は彼れの經濟的計畫に必要な材料を有つことになる。彼れは所得中の幾何を現在消費せんと欲するか、又幾何を將來の必要に備ふる爲め或は單に彼れの資本を增加する爲めに別にして置くことが出來るかを明かにする。斯くの如くにして社會に於ける貯蓄の總額が決定され、從つて如何なる時點

に於いても市場に提供される所の資本に對する處分の增加額が知れる。けれども尙ほこの他に、何等かの理由で實際所得以上を消費する人々に依つて爲さるゝ資本の消費を考慮しなければならない。この資本の消費は『消極的貯蓄*』とも謂ふべきものを表はしてゐる。積極的貯蓄からこの消極的貯蓄を差引けば社會の純貯蓄が判る。唯この純貯蓄のみが生產過程に資本の處分を供給するであらう。此等の定義は吾人の扱つてゐる問題の供給の方面を明瞭にそして最も自然的に說明するに便利であり又適切である。或る著者は別な方法で行つて、玆に言及した資本の消費を、生產過程中に端を發する資本の處分に對する需要に加へる。この行き方が正しくないとは恐らく言へないだらう。併しながらそれは確かに我々が最も自然な方法で考慮に入れなければならない實際的事例を反映

* negative saving.

してゐない、從つて吾人の前に横はる問題の要素をはつきりと調べるのには適當でない。實に、貯蓄と過剩消費とは、結局、或る人の一個の同一な經濟的計畫の異る方面なのである。過剩消費は後の貯蓄に依つて支拂はれなければならないが或は既に前の貯蓄に依つて支拂はれてゐるのであるから、多くの場合に於ては是等の異る方面も亦互に論理的に關聯してゐるのである。故に社會の純貯蓄を計算しそして之れを生產の處分に委された眞實な資本の供給だと觀るのは至つて自然なことゝ言はなければならない。

社會の純貯蓄は明かに利率に依存する、だからそれは利率が一定さるゝや否や決定せられると假定しても好い。ボエームバヴェルクの用語に在つては幾分曖昧な意味に於いて、現在財に對する將來財の多少一般的

な過小評價と見做されなければならないものが、今や明確な計數的方法即ち各利率に於いて生產の處分に委された社會の純貯蓄額に於いて表現されることゝなる。玆に於いて價格論が價値論に優つてをることが明瞭に證明される。

非常に低い利率に於いては資本の消費は單に次の理由に依つて異常な大さを占めるわけである。即ちもう二十五年生くべき人は、若し以上の期間に於いて全資本を消費することに決めれば毎年彼れの資本の四パーセントを自由に處分し得るからである。この單純な觀察は何故利率が約四パーセント邊に在つて同じて約四厘邊に在り得ないかといふ眞の理由を指示するものである。人の壽命が略々どれ位であるかに就いての統計と各種階級間の富の分配に關する我々の知識とを基調として一層深くこの問題を檢討するときは、利率と人類の壽命の長さとが興味ある關聯をなしてゐることが解る。

貯蓄の割合は如何なる社會に於いてもその進歩の割合と密接な關係に在る。現在經濟組織に在つては進歩は個人の家計の純貯蓄に依つて決定される。社會主義的共產體に於いてはそれは組織的社會自體に依つて決定されるであらう。併しこの場合に於いても進歩の爲めに現在の滿足を犧牲にせんとする慾望には狹い限界が存するであらう。斯樣に純粹な貯蓄の供給には常に限界が存するのである。

需要の方面に就いて我々は、以上述べた所に從つて、唯資本の處分に對する生產上の必要を考慮しさへすれば好いのである。勿論この需要は生產要素に對する總べての他の需要と同じく、既製の財貨と勞務とに對

する消費者の需要に基く。處で資本の處分の對價は消費財貨の相對的價格に對して重大な影響を及ぼす。何んとなれば、是等の財貨の生産には非常に異る額の資本の處分が必要であり、從つて利率の增加は或る種の財貨――例へば家賃や鐵道賃金――の價格を特に高く騰貴せしめるからである。斯くの如くにして消費者の需要は利率の變動に依つて實質的に影響を被りそして常に再び斯かる變動を及ぼす。されば利率の增加は資本の處分に對する消費者の間接的需要の減少を惹起し又はこれとは反對の現象が惹起される。この事實は資本市場安定の說明の本質を成すのである。現在財と將來財との交換形式の結構內に於いて是等の關係の明瞭な說明を爲すことが如何にして可能であるかを了解するのは極めて困難なことである。

利率は現在あるが儘のものよりも低くなり得ない、何んとなれば、若しさうなれば資本の處分に對する消費者の間接的需要が供給より大きくなるであらうから。この事は利子論の核心を成す。消費者資本の處分に對して互に競爭し、斯くてこの處分の對價を或る高さに迄引上げる。問題を斯くの如くに言ひ表はすことは、實際家の利子の觀念を明瞭ならしめそして彼等を科學的分析と接觸せしめるのに良く適當してゐるやうに思はれる。同時にそれは利子の必然性が現存社會組織に限られたものではなくて、資本の處分に對する凡ゆる需要を滿足することの不可能なるに起因するといふことを直ちに示すものである。斯くの如くにして利子價格論は、利子の必然性といふことに關して、從來の價値論の助けに依つて得られるよりも遙かに確定的な結果に到達するのである。

第三章　稀少性原理と費用の概念

「經濟とは人類の必要を滿足させる手段が或る程度に稀少であるといふ條件の下にこれ等の必要充足手段を獲得することを意味する。かくて凡ゆる經濟に於いて必要は制限せられ、需要は切り詰められて、唯利用し得る手段に依り滿足され得る程度に止められざるを得ない。これが「稀少性原理*」である。「自給自足的孤立家族に在つてはこの事は單に一家の全消費を調節する支配者の意志に依つて行はれる。共產主義的に組織せられた社會に於いても恐らく同じやうなことが行はれ得るだらう。交換經濟に於いては需要を調節する中央機關が存在しない。交換經濟の特質は、各個人の全購買力の限界內に於いてはその享樂する消費の選擇が自

* Principle of Scarcity.

由であるといふことに存する。この消費の自由に人々は極めて高い價値を認める、尤も彼等はかゝる自由を自明のものと見做すから一般にはこれを意識しないのである。併しながら交換經濟に於いてすら總べての需要を滿足させることが不可能であるから、交換經濟は適當に需要を制限する手段を有する必要がある。この手段が卽ち價格なのである。一物品に價格が付せられるとき、その價格を支拂ふ準備の整つた需要のみが滿足されて、總べての他の需要は切り捨てられる。斯くの如くにして需要は制限せられて供給と合致するに至る。これが交換經濟に於ける「稀少性原理」の形式である。我々は物價が明確な社會的機能を遂行しなればならないことを見る。物價の目的は凡ゆる方面の需要をば利用し得べき供給に依つて滿足され得る程度に制限するに在る。物價はこの目的が達成される程度に高くならなければならない。

是れ私が從來種々な論文に於いて展開しそして事實上私の經濟學的全業績の根抵を成す價格論の核心である。この理論の構成には何等の自由裁量も存しないのである。それは實に凡ゆる經濟の基礎的事實、卽ち人類の要求を滿足させる手段の稀少性にその根抵を有する。而してそれは交換經濟が凡ゆる經濟の基礎的問題に與へた解決、卽ちこの稀少性に合致する要求の制限といふことを如實に表現してゐる。

この私の理論に對して、それは物價の全組織を或る目的の爲めに構成されたものとして表現してゐるといふ反對論が唱へられ、そして私は斯樣にして常に科學から除外さるべき目的論の要素を經濟學に導き入れたといつて非難された。この反對論は大して重要ではない。我々は總べて

自然科學に於ける最も普通な事件に就いて同様な言ひ方をする慣習になつてゐる。例へば、心臟は全身に血液を送る機能を有する、そして呼吸の目的は血液に酸素を供給するに在るといふが如きである。我々は決して斯くの如き表現法に依つて自然界の目的論といふ問題に立脚してゐることを意味しない。唯單に種々な機關の機能を便利な方法を用ひて述べるに過ぎないのである。同様なことは經濟學に於いても爲し得る、而も非常な利益を以つて爲し得る。實際一般人としては、物價は需要を切り捨てるといふ明確な目的を有し又斯くすることに依つて重要な社會的機能を果すのだといつた風の考へ方をするのが至つて穩當であらう。蓋し人々は屢々需要が物價騰貴の爲め減ぜられたといふ悲しむべき事實を喞ち、それから直ぐに「政府」が干渉して物價騰貴を止むべきであると論ずる。併し若しも當局者がこれを爲せば、交換經濟に於ける價格決定の全機構を攪亂し、そして現存の供給に依つては需要を滿足させることが不可能である所の狀態を創り出す。その結果は單に必要な需要の制限が不規則なそして一般に極めて非合理的な方法に依つて行はれねばならぬことゝなるに過ぎない。

需要される物品に十分な高値を附して需要を制限する方法は總べての場合に適用出來ない。成る程、大抵の必要は個人的であるから、或る價格の支拂ひを該必要滿足の條件とすることに依つて制限され得る。併し必ずしも常にさうとは限らない。或る必要は性質上集合的である、卽ち一集團の必要であり、集團全體としてのみ滿たされ得る必要である。一旦斯くの如き必要が滿足さるゝや、集團に屬する如何なる個人をもその

滿足の享受から除外し得ないのである。從つて或る價格の支拂ひを以つて財貨を個人に供給する條件となすことは不可能である。その最も典型的な事例は傳染病豫防の必要が生じた場合の如き是れである。一度一地方の爲めに豫防方法が講ぜられるや、該地方の總べての居住民がその利益を受ける。彼等をこの利益の享受から除外することが出來ない。されば個人に向つて彼れの利益の分け前に對する支拂ひを請求することが不可能である。この困難は、全居住民の强制機關を作り、この機關が必要な保護の爲めに支出を爲し得るやう、彼等をしてこの機關に對して醵出金を支拂はしむることに依つて除くことが出來る。總べての斯くの如き機關中最大のものは「國家」であるが尙ほ同性質な地方團體の全系列が存する。その本質的な機能は集合的必要——この用語に對して玆に與へられた明確な意味に於いて——の滿足手段を獲得するに在る。そは租稅を集め、依つて以つてその成員の集合的必要を充す爲めの總べての費用を支拂ふ。勿論集合的需要それ自體は、集團がその欲する財貨に對して支拂ふを要する價格に依つて制限せられる。この樣にして全交換經濟內に於いては集團も個人的な財貨需要者と同等にされる。私が今述べた如くにして展開した集合財貨理論の立場から國家及び地方團體の財政を取扱ふときは非常な利益が得られる。この理論は直ちに公共團體に本質的な經濟的特質、並に社會の一般的交換經濟內に於いて財政の占むる眞の地位を明かならしむるものである。

この樣に消費者としての公共團體に正當な地位を與へた後であるから物價の職能は各方面の需要を制限して供給と一致せしむるに在るといふ

我々の立論にも一般的妥當性を賦與することが出來る。然るときはこの公式は交換經濟内に於ける物價決定の過程の一般的説明に對する出發點となる。

物價の決定のみが唯一の可能な需要制限法ではない。需要は國民に或る數量以上を消費することを禁ずる法律に依つても調節され得る」。事實上、こは大戰中切符制度に依つて大規模に行はれたのである。併しながらこの制限法は、今では悲しむべき經驗の結果誰でも知つてゐる通り、極めて不愉快であり又極めて不經濟である。將來、社會が異常な事情の爲め制限法を採用せざるを得ない場合には、個人的需要を調節する爲めに斯くの如き方法に依る外はないであらう。この事は勿論切符制度が普通に用ゐらるゝことあるべき可能性を排除する譯ではない。例へば瑞典に於いては酒精飲料消費の如き有害な消費を制限する爲めに實際にはこれが行はれてゐる。去りながら、進歩した交換經濟としては原則として需要がその支拂ふべき價格に依つてのみ調節されるのでなければならない。

假りに消費財貨の供給が一定數量で與へられるとし、又その上に、消費者の貨幣所得が一定せるものと假定せよ。然るときは我々は如何にして物價が「稀少性原理」に從つて決定されるかを研究すべき最も單純な場合を見る。消費財貨の各々に價格が附與さるゝや否や、各消費者はその所得をどう處分しようかといふこと、即ち各財貨の幾何を購買せんと欲するかを知ることが出來る。斯くの如くして消費財貨の各々に對する社會内の全需要が決定される。この需要は――平衡の狀態に於いては――

供給に等しくなければならない。我々は消費財貨の種類のみ斯くの如き條件や方程式を有し、かくて總べての價格を同時に決定するのにもこれ等の條件を以つて足る。

物價決定の過程をこれより簡單に說明する方法はない。蓋し一特定財貨に對する個人的需要は一般に、單にこの財貨の價格のみならず――少くとも或る程度まで――總べての他の財貨の價格にも依存するを以つて唯各財貨の價格はこれに對する需要をば供給に等しくなる迄減少せしめなければならないと述べるのみにて價格問題を解決することは不可能である。

今度は消費財貨の供給が一定してゐるといふ假定を棄てゝ、これ等の財貨が生產され得る事實を勘定に入れよう。然るときはこれ等の財貨の絕對的稀少性が存しないことゝなる。その代り、我々は溯つてそれ自體は生產され得ない所の基礎的生產手段の稀少性に至る。そこでこれ等の基礎的生產要素の供給が一定數量で與へられると假定しよう。然るときはその存在量は絕對的に稀少となり、「稀少性原理」はこれに對して適用出來る。事實上、消費財貨に對する需要は今や基礎的生產要素に對する間接的需要となり、從つて「稀少性原理」は同樣にして問題の解決に導く。

それ〴〵の生產要素に對して或る價格が存すると假定し、又我々が消費財貨の各一單位の生產にこれ等の要素の各幾何が必要であるかを知つてゐると假定すれば、消費財貨の價格も亦從つて知れることになるだらう。然るとき消費者は彼等の需要を決定することが出來、從つて我々は

消費財貨の各幾何が需要されるであらうかを知ることが出來る。加之、これ等の數量の消費財貨の生産に必要な基礎的生産要素の數量も亦知れる。處で、生産の基礎的要素に對するこの需要は、各要素に就いて、その一定した供給と等しくなければならぬ。斯くて問題中の未知の數量、卽ち基礎的諸生産要素の價格に當るだけの條件や方程式が存することゝなる。これ等の價格を決定するにはこれ等の條件で十分である。吾人の全方程式組織が今や決定せられ、全價格問題も之に依つて解決された。何んとなれば今や我々はそれ〴〵の消費財貨の價格をも知り、從つてこれに對する需要額を知つてゐるからである。のみならず我々は又種々な生産要素が如何に處分されるかを了解出來る。これ等は、今や明かとなつた割合に於いて、種々な消費財貨の生産に用ひられる、而して需要を

滿足するに必要な額だけこれ等財貨の各々が生産されるであらう。

この分析――私は「社會經濟の理論」中でもつと十分にこれを行ひ又必要な數字的形態をこれに附與して置いた*――は既に物價決定の過程に本質的な性質を明かに示す。併し勿論それは不完全なものであるから更に展開せしめられなければならない。殊に、我々は消費者の貨幣所得が一定してゐるといふ假定を棄てなければならぬ。實際上交換經濟に於いては個々人の所得は彼等が生産過多に寄與する所の基礎的生産要素の價格に依つて決定されるのである。勿論這般の事情は價格問題の方程式組織を少〻複雜にはするが、吾人の解答の特質を變更するものではない。吾人の方程式組織は向後啻に消費財貨及び基礎的生産要素の價格を決定するばかりでなく、社會全員の所得從つて所得の全社會的分配をも決定

* 社會經濟の理論、第三章及び第四章參照

する。

吾人の分析を更に展開せしむるならば、消費財貨に對する現在の需要は一般に基礎的生産要素に對する現在の需要ではないといふ事實を勘定に入れなければならないであらう。大抵の場合には一生産要素が生産過程に導き入れられた瞬間から、この需要が共働した所の最終生産物が消費者に達する瞬間までに若干の時間が經過する。斯る事情から生ずる複雜性は繼續的生産過程を吾人の研究對象とする時初めて明かにされるのである。茲に於てこの概念の重要度否必然性が特に確實に現はれる。繼續的經濟に於ては、吾人は基礎的生産要素の繼續的供給を必要とする所の、消費財貨に對する繼續的需要を取扱はざるを得なくなり、又この需要とこの供給との間に存する關係を知らなければならない。何等の進歩もなく靜的階段では、消費財貨に對する現在單位時間中の需要から發生する早期生産要素に對する需要は、消費財貨に對する將來需要全體から派生した所の、この期間中の生産要素に對する全需要に等しい。從つて我々は消費財貨に對する需要を單に恰もそが基礎的生産要素に對する直接需要であるかの如く言つても宜しいのである。進歩的社會に於いてはさうでない。其處では後者は將來の必要から來るのだから、現在の消費を表現する前者よりは必然的に大きい譯である。これは實生活に於いても亦考慮に入れるべき一つの事實である。吾人は常に現在の慾望滿足に照應するものよりも一層大なる要求を現在の生産力の上に置いて計算しなければならぬ。斯くの如き要求に應ぜんとする意志が進歩的社會の特質なのである。この意志は何等かの方法で或る程度の貯蓄となつて表は

れそして實にこれが進歩の率を決定するのである。簡單にする爲めこの率を不變なものと假定しても差支へない。然るときは劃一的進歩的經濟を取扱へばよいことゝなる。この經濟に在つては、劃一的に增大する消費に備へ得る爲に吾人は劃一的に增大する基礎的生產要素の供給を有する。この場合に於いては現在の單位時間に必要な供給は、この期間に於ける消費者の需要に依存するのみならず進歩の率にも依存する。併しながらこの率が一定されるや否や生產要素の現在の必要は消費財貨に對する現在の需要に依つて決定される。然るとき吾人は前の如く價格決定問題に對する吾人の解答を以つて進むことが出來る。

勿論消費者が、現在の消費に照應するよりも大なる現在の生產要素供給に對して支拂ひをなすと期待することは出來ない。爾餘の生產要素は貯蓄者に依つて支拂はれるのである。されば如何にして貯蓄が進歩の率を決定するかゞ明かに了解されるであらう。如何なる單位時間に於ける社會の總所得でも該期間に供給される生產要素の總價格に等しいのである。併しながら、進歩的經濟に於けるこの供給は、同期間中の消費に照應する供給より以上に增大するから、社會の所得はその消費の總價格よりも大なのである。爾餘の所得は該期間の貯蓄を表現し、而して同期間に生產された眞實な資本の增加額の購買に向ふ。

我々は價格論の說明に於いて、必要とされる生產要素の價格が知れるや否や如何なる生產物の價格でも知れるといふことを假定した。が實際にはこの原則には一團の例外が存するから完全な理論ではこれを勘定に入れなければならない。私は玆にはこれ等の例外中最も本質的なもの二

つだけに就いて言及するであらう、卽ち、需要を滿すに必要な異種の企業中に異種の費用が存する場合、並びに或る一商品の生産に使用される要素の相對的數量に變化の起り得る場合がこれである。斯くの如き場合には「稀少性原理」は、價格問題を決定的ならしむべく充分ではない。故に或る補助的原理を導き入れる必要がある。これ等の原理も總べて究極に於いては、經濟の最大限が到達さるべきものであるとの一般的原理から抽出されるのであり、從つてこの原理と同樣の妥當性を有するのである。これ等の原理とは卽ち――茲に言及した場合に於いては――「差別的原理*」と「置換原理**」とである。「差別的原理」は我々に生産物の價格は需要滿足に必要とされる如何なる企業でもの最高費用に照應しなければならないといふ事を物語つてゐる。然る時より低い費用で經營する

* Diffrential Principle.
** Principle of Substitution.

企業は普通に差別地代と稱せられてゐる差別的利益を有することゝなり これがそれ自體の價格を支配する、而してこれ等の地代が種々な企業の費用をレベルアウトする。「置換原理」は我々に生産に使用される種々な數量の要素間に想像せられ得る總べての關係の中に在つて生産費用を極小ならしむるものが選擇せられるといふことを物語つてゐる。これ等の原理は共に凡ゆる經濟學徒に周知のものであるから、私は茲に唯その補足的原理なる性質、卽ち基礎的な「稀少性原理」を修正はするがそれに置き替はるものではないといふことを强調しやうと思ふ。肥沃な土地の稀少性は、食物に對する需要滿足の爲めより肥沃ならざる土地が使用され得る時には變更される。併しながら肥沃な土地が價格を有する理由は決してより肥沃ならざる土地の存在といふことに存しない。經濟學の敎

科書が恰もこれが眞相であるかの如く發表するとき、ピンが嚥み込まれなかつた爲めに、無數の人命を救つたといふ諺を想起せざるを得ない。

同樣にして、一つの種類の秣の稀少性は家畜を飼育する爲め他の秣を以つてこれに代らしめ得る可能性の爲めに變更される、併しながら總べての種類の秣が稀少なる限りその稀少性は家畜飼育經濟の基礎的事實である。供給方面に於いて一種の秣に價格が支拂はれるといふ究極のそして本質的な理由はその稀少なることに存するのであつて、他の秣に依つて置き換へられるかも知れないといふことに在るのではない。

特殊な場合に於いて生產費用決定に必要な所のこれ等の並びにその他の補足的諸原理を導き入れるとき價格問題全體が決定されるに至るのである。我々は物價が同問題に就いての所與の諸要素に支配され、又基礎的にて慾望滿足の手段がこれ等の慾望の强度に比して稀少なことに支配されることを見出すのである。

然らば次の如き質問が出るであらう。價格問題の解決法として複雜な方程式組織を與へて何の役に立つか。我々は、これ等の方程式を解くことが出來ず又それ等に依つて物價を實際に計算することが出來ないではないか。されば我々の樣な問題の扱ひ方に依つて果して何の得る所があるだらうか、併し私の考ふる所に據れば我々は非常に重要な利益を得ると思ふ。

我が方程式組織に本質的な第一の利益は、そが價格問題に於ける因果關係の本性を示すに在る。該問題に關する吾人の解決は、總ての價格が同時に決定せられ、そして種々の價格群の間にはその原因たる位置に在

るか結果たる位置に在るかに就いて前後の順序なるものが存しないことを直ちに示す。價格問題の眞實な決定的要素は我が方程式組織中に於ける諸の所與の數量なのである。斯くの如き數量から成る三つの主要な群が存する。第一に、消費財貨の價格に對する需要の依存と特徴づける數量、第二に、技術的意味に於ける生産費用を決定する技術的共同作因、そして第三に、我々が確定的數量で與へられるものと做した所の基礎的生産要素の供給が是れである。第一群は價格問題の主觀的要素と謂ひ、第二群及び第三群は客觀的要素と謂つても好いであらう。これ等の要素が物價決定の究極的基礎を形造るのである。それ等はこの問題に對し同樣の重要度を有つものであり、我々はそれの間に就いて何等の前後の順序が存するとも謂ひ得ないのである。斯樣な譯で、或は供給方面の客觀的要素に重きを置き或は需要方面の主觀的要素に重きを置く所の客觀的價値學說又は主觀的價値學說は、我々のやうな問題の扱ひ方に依つて豫め排除されてゐる不可能事なのである。

一旦價格問題の決定的要素が與へられる時は、該問題に就いての總べての未知の數量も同時に決定せられる。この眞理は獨り總べての價格に當て嵌まるばかりでなく、種々な方面の生産に使用せられる種々な生産要素の數量、從つて又その『限界生産性*』、消費財貨の各々の生産される數量、各需要の滿足される程度、從つて又總べての生産物の『限界效用』等にも當て嵌まるのである。玆に於いて『限界生産性』や『限界效用』が物價を決定するとなす如何なる學說も誤りであることが特に明瞭にされる譯である。若しこれ等の概念が便利であることを見出すならばこれを

* Marginal productivity.

導き入れても差支へない。けれどもそれ等は我が方程式組織の結構内に於いてその地位を有し、又それ等は決してこの組織を不必要ならしめ得ないといふことを常に記憶すべきである。近代の經濟學者は價格問題に關する總べての未知の事項が相互に支配し合ふことを指摘した。かゝる觀察は價格問題に於ける決定力を該問題中の未知の事項の何れかの一組に歸せしめた學派の誤謬を明かにするのに役立つた。併し乍ら我々にこの相互依存の新概念が新なる誤解に導かないやう注意すべきである。該問題に關する未知の事項が眞實な意味に於いて相互に支配し合ふとは謂ひ得ない。これ等の中どの一つとして斯くの如き支配的力を働かすに足るだけの獨立性を有するものがないのである。實は、それ等は總べて吾人が基礎的なものとして銘記し又所與のものと做した所の該問題の要素に依つて支配せられ且つ同時に決定されるのである。

我が方程式組織の第二の大利益は第一のものと密接に關聯してゐる。そは物價論に於いて「稀少性原理」に眞實なる地位を與ふるに在る。我々の研究の第一階段に在つては消費財貨の稀少性に一定してをつて該問題に於ける一組の所與の要素を形造ると見做される。第二の階段ではこれと同樣の地位が今や確定的數量に於いて供給されるものと假定された所の基礎的生產要素の稀少性に依つて占められるのである。我々は更に一歩進んで物價が基礎的生產要素の供給に及ぼすことあるべき影響をも亦考慮に加へても宜しい。然るときこれ等要素の稀少性は最早や絕對的のものではなくなる、併しそれだからと云つて全然消滅して了ふと謂ふのではない。そは唯物價の騰貴に應じて供給の增加され行く緩漫度に依

つて置き換へられるに過ぎないのである。斯くの如くにして稀少性はその形態を變更することはあつても、そは常に該問題中に於ける一の所與の要素たる地位を保つのである。

價格決定といふ大過程の逐次的階段に於けるかゝる取扱ひ方に依つて各階段に於いて明確な結果に到達することが可能となる。我々は價格問題全體を全く同時に取扱はうとする如何なる試みにも必然的に關聯してゐる諸の困難を避けることゝなるのである。勿論、我々の研究の種々なる階段を通過して行くに連れて、我々の有する未知の事項の範圍が擴大され、そして前の階段では所與のものと看做された所の要素をも包含するに至る。併しながら各階段に於いて未知の事情は該階段で所與のものと做された要素に依つて決定され、かくて所與の要素と之れに依つて決定さるべき未知の事項との間には常に明確な區別が存在するのである。この樣な諸概念の明瞭であるといふことは一般的『相互依存*』と云つた寧ろ漠然たる觀念に比して非常な進歩である。

我々が我が方程式組織から抽出する今一つの大利益は物價の平衡狀態なるものが存在し、且つ如何にしてこの平衡狀態が決定されるかゞ解るといふことである。我々はこの平衡狀態の如何なる攪亂に對しても反動を與へる凡ゆる力を明瞭に理解する。我々は、例へば、價格下落の總べての結果を叙述し得る地位に在るのである。一の基礎的生產要素の價格が極く僅かばかり引き下げられたと假定すれば、その結果はこの生產要素が入り込む總べての生產物の價格が之れに相當するだけ引き下げられることになる。かくてこれ等の生產物に對する消費者の要素が增加する

* mutual dependence.

從つて、之れをもつと多く生産することが必要となるのであらう。されど、こは該基礎的生産要素に對する增大した需要を意味する。併しながらその全供給は既に前に生産に必要とされてゐたのであるから、この新規の需要を滿足するのは不可能である。この需要は十分高い價格に依つて制限せられなければならない。從つて該要素の價格は再び騰貴するに相違ない、そして之れに依つて我が出發點と爲した所の平衡狀態が回復される。例へば、若し、平衡狀態に於いて利率が實際より僅かばかり引き下げられるならば、その結果は消費者に供給される爲めには多大の資本の處分を要するやうな商品に對する增大した要素となつて現はれるだらう。家賃、鐵道運賃、電力料金は安價となり、そしてこれ等の商品に對する需要は增大し、その結果は資本の處分に對する需要全體が供給を超過するに至るであらう。然るときは利率は滿足され得ないやうな需要を切り捨てることが出來る爲めには再び引き上げられねばならぬであらう。この合理的利子論の全くの眞髓すら、說明中「稀少性原理」に適當な地位が與へられぬ爲め、全然閑却されるとは云はぬ迄も、普通後方に押しやられてゐるのである。

斯樣な譯で何故基礎的生産要素が價格を有しなければならぬかの根本理由は若し然らずんばそれに對する消費者の間接的需要が供給に超過するであらうといふことに存する。このやうに叙述するときは『勞働價値學說*』——之れに從へば一生産物の價値は專ら之れが生産に費したる勞働に依つて決定されることになる——の無效なることが最も簡單に且つ最も斷定的に證明せられる。玆に於いて了解さるゝ如く、又私が前に說

* labour theory of value.

明した如く、價格は需要を制限し、これを或る一定程度の不十分さに於いて與へられる所の供給に依つて滿足され得るやうにするといふ本質的な機能を有するのである。之れが「稀少性原理」なのである。或ひは、この原理は古くから有り來りの需要供給說に過ぎないと謂へるかも知れない。之れは或る意味に於いて眞實である。にも拘らず、私は、以上爲した如く、各經濟に取つては慾望充足の爲め、自由にし得る手段が稀少であるといふことが本質的に重要であるとのことを强調するのは有用であると思ふ。斯くの如き稀少性の存在こそ經濟 economising をして必然的ならしめる基礎的事實なのであり、從つて、吾人は吾人の經濟理論中に於いてこの稀少性に對しそが當然有すべき中心的地位を與ふべきである。經濟學の研究を始めた抑々の初めから私は、この點に於いて何か缺くる所があるのを感じて居つた。成る程、市場の狀態に關する論議に於いては稀少性に對して注意が拂はれた。この點に就いては、價格が需要供給に依つて決定されるといふことに諸家の意見が一致したのであり、此處に吾人は「稀少性原理」が多少認められた形跡を見るのである。けれども價格問題の分析が展開せられ究極的生產要素の價格をも包攝しなければならぬやうになるや否や、以上の如き見解、從つて「稀少性原理」の全體が後方に押しやられざるを得なくなり、そして實に或る場合には全然消滅さへして了ふといふのがその特徵である。

一般的物價論の建設に對する最初の有意義な努力はリカルドオ*に依つて爲された。とゞのつまり何が物價を決定するかとの質問に答へねばならなくなるや、彼れは生產費說**を採るのである。併しながら商品の價格

* David Ricardo.
** cost-of- production theory.

を生産費に歸着せしめる所の學説は遂に次の如き疑問に逢着しなければならぬ。然らば基礎的生産要素の價格は如何にして決定さるゝか。是等の要素に對しては生産費説の説明は失敗であり、從つて唯一個の生産要素のみ存する場合を除いては、徹底的生産費説を貫くことは論理的に不可能である。でリカルドオの全學説は私が一九一一年のチューピンゲンツアイトシュリフト中*の論文で説明したやうに、價格論が考慮に入れなければならない數多の生産要素を一個のものに還元し、以つて彼れの生産費説を可能ならしめることに對する偉大な努力であつたと見做されなければならない。この單一な生産要素はリカルドオの體系に在つては勞働である。生産要素としての土地は價格決定の全過程をして何等の地代も支拂はれない耕境の上に營まし�むる所の有名なリカルドオ的方法に依

* Die Productionskostentheorie Ricardo's. Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft. Tübingen, 1801.

つて除外され、資本は、凡ゆる方面の生産に於いて要求される資本の使用は要求される勞働量に比例すと假定され得との少し大膽な單純化に依つて除外されてゐる。斯くの如くしてリカルドオは總べての財貨の價格はその勞働生産費 labour cost of production に比例すといふ結果に到達してゐる。

その推論は論理的ではあるけれども、少し抽象的に過ぎ、そして誤解されたが爲め非常な害を爲した。殊に、近代社會主義の礎石となつた勞働價値學説は、私の示した如く、リカルドオ説を誤解した直接の結果なのである。リカルドオの學説の基礎となつてゐる諸單純化は非常に不自然であるから實際的價格決定過程に於いて眞實に發生する所を公平に表現し得ない。リカルドオの學説の最も欠點とする所は彼れの基礎的單純

化を改訂することに依つてそれを改良し又は更に展開せしめ得ない點に在る。何んとなれば之れを爲すや否や全學說の基礎を成す本質的假定、卽ち物價論に於いて考慮に入れるべき生產要素は唯一個しか存しないといふ假定を捨てなければならなくなり、そして又種々な生產要素の存在に逢著するや否や、前述の如くリカルドオ的生產費說は論理的に不可能となるからである。

猶は、リカルドオの體系に於いて、勞働の價格と資本處分の對價とが如何にして相互間に決定さるゝかを說明しなければならない。一時間の勞働の結果の賃銀利潤間への分配はリカルドオの體系に在つては、若し適當な報酬を得ないならば勞働も資本の蓄積も共に或る程度まで引き上げられるといふ事實に依つて決定される。玆に於いて、或る價格でなければ生產の人的動機 human agents of production は彼等の勞働を供給することを欲しないといふことが價格問題に於ける一の獨立的要素として導き入れられてゐる。この點に於いて吾人は後の諸學說が基礎的生產要素の價格を決定し、依つて以つて數多の生產要素を一に還元するの止むを得ざるに生ずることなくして能く一般的物價論を建設するを得べく努力した出發點を有つのである。

先きの生產費說に反して後の主觀的價値學說は總べての價値が社會成員の主觀的需要にその根抵を有し、この主觀的需要こそ物價論の基礎とせらるべきであると主張した。この學說の根本的失敗はその諸學說が價格の決定に於いては異る數組の共働要素に言及するのは矛盾であると考へた事實に依つて暴露されてゐる。勿論、斯くの如き關係を顧みない考

へ方は、該問題の特殊な諸方面を論ずる際には縱し十分に精鋭なものであらうとも、交換經濟が物價を決定する機構の明かな觀念を形成することは出來ないのである。

近代の諸家中でマーシャル*は確かに價格問題に關する最も含蓄ある見解を持して居つた。彼れの理論には一面的な所がない。彼れは供給方面に作用する要素を需要方面に作用する需要と丁度同じ樣に顯著ならしめてゐる。彼れは遙かに遠くリカルドオに依つて置かれた基礎の上に建設したとも謂へようが、併し彼れはその後の經濟學上の考へ方の總べての成果を利用した。然らば彼れは如何にしてリカルドオ的體系の根本的困難、卽ち吾人は數種の異る生產要素を考慮に入れなければならず、從つて總べての費用を一の共通尺度に還元することは不可能であるといふ事

* Marshall.

實に打ち勝つことが出來たか？　數種の基礎的生產要素を取扱はざるを得なくなるや否や吾人は先づそれ等の價格を決定するものゝ何たるかを明かにしなければならない。之れに對するマーシャルの解答は或る生產要素に對しては十分なる供給を喚起せんが爲めには或る價格が支拂はれなければならないといふに在る。該要素と言ふは總べて人的のものであつて、價格は人間の意志を導いて何事かを爲さしめんが爲めに支拂はれなければならないのである。されば人間の意志が、提供された價格に應ずるやうな事柄が價格問題に於ける一新要素となつてゐるのである。マーシャルがリカルドオ的生產費說を展開し以つて經濟生活の實在をより眞實に反映してゐる所の含蓄ある物價論と成すを得たのはこれ等の基礎的要素を導き入れたからである。

マーシャルがこの様な方法で扱ひ得たる二大生産要素は勞働と貯蓄である。明かにその方法は異る種類の勞働にも亦當て嵌まり、かくて初期の經濟學者達が異る種類の勞働を共通尺度に還元せんとして經驗した困難に打ち勝つことが可能となる。凡ゆる種類の勞働に對して、仕事を爲すに要し又その爲めに必要な熟練を獲得するに要する『努力と犧牲』*を償ふに十分な價格が支拂はれなければならない。同樣にして貯蓄又は『忍耐』waiting に對してはその忍耐に含まれてゐる『努力と犧牲』を償ふが爲めに價格が支拂はれなければならない。マーシャルの體系では是等の努力と犧牲が實質的費用を構成し、それ等に對して支拂はるべき總價格が貨幣で表はされた生産費なのである。マーシャルの物價問題解決は今や供給方面に於ける決定的要素としてのこれ等の生産費の上に築き上げられることゝなる。

* efforts and sacrifices.

尙ほ仔細にこの解決を考察するとき吾人は非人的生産要素が全然看過されてゐる事實に遭遇する。此點にマーシャルはリカルドオの轍を履む者である。價格問題は何等の地代も支拂はれない耕境に於いて研究されてをり、從つて生産費又は生産物の價格中には何等斯くの如き地代が包含されてゐない。この原理を擴張して行くならばマーシャルは價格決定過程中から總べての差別的所得又は『準地代』*を除外することが出來る然らば則ちこの過程中では唯供給がその價格に依存してゐる所の人的生産要素だけが考慮に加へらるべきものとして殘るのみである。斯くの如くして全學說は完全なやうに見える。

去りながら、この驚くべき建設的天才の偉大な業績も、その非常な功

* quasi-rents

績を有するに拘らず、確かに尠からず不自然である。第一に、勞働と貯蓄との供給は價格の增加に應じて增加すとの假定はマーシャルの體系に在つては實際上にその比を見ざる程の全く根本的重要度を有してゐる。縱し上述の生產要素の供給が或る程度まで之れに對して支拂はれる價格に應じて變動するといふことが眞實であるとした所で、この事實は決して一般的價格問題の解決可能に本質的な條件とは考へられ得ない。吾人の極めて自然的な本能が假令勞働と貯蓄との數量が一定されてをり又これ等要素の價格に於ける變動と無關係であるとしても價格論を築き上げることが可能なるべきことを敎へる。實に、價格論の廣汎な一般的說明に在つては、このことは出發點となるべき最も自然的な單純な假定である。八時間勞働が法律で强制せられ、勞働の配置が一般に勞働組合に依つて調節されてゐる現時の如き社會に於いて、勞働の供給のその對價に對する依存を以つて一般的物價論に礎石の一となすのは確かに多少大膽である。我々は唯勞働の供給が嚴格の固定せる社會に於いて價格決定の過程が如何に作用するかを示すべきのみである。同樣にして、吾人の實社會に於いて供給される貯蓄の額は確かにしかくその對價に依存するものではないから經濟理論の根本的基礎を置くに當つて毫もこの依存性を特に取り立つべきではない。縱し貯蓄が實際に於いて利率の小變動に無關係であるとしても經濟理論は其本質的疑問に答へ得べき筈である。若し吾人の理論に對してこれ等の要求を爲すならば、稀少性原理がその基礎的原理として現はれるであらう。然るとき『勞働』並びに『貯蓄』なる項目中に包含される如き勞務に對して價格が支拂はれるといふ事實は

單にこれ等の勞務の供給の稀少性の結果に過ぎないことが明かとなる。といふのは價格はそれ等に對する需要を切り捨てゝ供給に等しからしめる職能を有するからである。この說明に本質的な眞價はその絕對的客觀性を有するに在る。それは經濟學の發達を通じて不幸な役割を演じそして社會的分配の問題を斯程まで不必要に論議の種たらしめた所の價格の道德的辯護の何の片影をも全然留めないものである。それは價格は本來生產要素の所有者が該價格を請求し或はその支拂ひを以つて彼の勞務提供の條件となすが爲めに支拂はれるものではなくて、本質的には要素がそれに對する需要に比して稀少であるが故に支拂はれるのであるといふことを明かならしめる。この「稀少性原理」はマーシャルの說では後方に押し込まれてゐるのである。併しながらその爲めに吾人の注意は價格問題全體の最も本質的な方面から引き出されてゐるのである。

第二に、この行き方の結果は物價決定の基礎的說明に於ける二元論といふことである、卽ち或る生產要素はそれ自體の供給價格を有するものと認められ、從つて、十分に價格決定過程中の決定的要素として認められる、然るにその他の生產要素は、巧に差別的原則を使用することに依つて、簡單に全過程から除外されてゐる。私は常に之れは極めて不自然であり、物價決定の大過程中に於いて總べての異る生產要素に對等の地位を與ふることが可能なるべき筈であると感じてゐた。

之れは吾人の方程式組織に依つて爲される。或る沃度を有する土地は凡ゆる人的生產要素と丁度同じくその稀少性の爲めに價格を獲得するのである。總べての基礎的生產要素は價格決定の一般的過程中に在つて相

同じき立場に置かれ、そしてそれ等の價格は總べて同時に決定される。この問題の見方は、勿論、一の新しい費用概念にまで導く。費用は今や貨幣に依つて表現せられ、唯要求される各種の生産要素に對して支拂はるべき總べての價格の總額たり得る。この概念は純粹に客觀的である。そは唯價格が支拂はるべきであるといふ事實を考慮に入れるのみであつて、これ等の價格が『努力と犧牲』に對する報酬を表現するや否やの問題を全然除外するものである。本質的には、價格が基礎的生産要素に對して支拂はれるのはそが或る稀少程度に於いて供給されるが故である。從つて費用は本來單に稀少性の表現に過ぎないのである。併しこの新費用概念は十分に廣汎であり客觀的であるから物價決定に於いて生じた諸種の影響とは無關係に妥當性を有する。費用は如何なる場合に於いても唯實際に支拂はるべき物價の總額を意味すべきである。從つて或る種の生産に於いて土地の使用に對し支拂はるゝ價格は生産される食料品の費用に入込む。若し同樣の生産がその他の費用がより高價な他の土地に於いて行はれるならば、この土地の使用價格はその全生産費が前の場合に於けるそれと等しく又生産物の價格と等しくなるだけそれだけ低くなければならない。玆に於いて「差別的原理」が入り來る、が併しそれは唯一般的「稀少性原理」に從屬して價格問題の決定を助ける所の補助的原理としてのみ入り込むのである。この問題の解決と共に、斯くの如き土地の使用費をも亦含む所の總べての費用が知らるゝに至る。恐らくこれ等の立言は我々がこのやうな方法で進んで到達した費用論の要綱を明かならしむるに足るであらう。この問題に關する一層完全な説明は私の主

著に讓らなければならない。

私の考ふる所に依れば斯くの如く定義された費用概念は一般的實際家の有する費用の觀念と密接に照應することが本質的な利益であると見做されなければならない。生産者は諸種の生産要素の協働に對して支拂ひをしなければならない。彼れに取つては斯くの如き目的の爲めに支拂つた各金額が費用なのであつて、それが土地の使用に對して支拂はれたか或は又何等かの人間の勞働に對して支拂はれたかは問ふ所ではない。だから經濟理論が費用たる費用と費用たらざる費用との間に持する慣行となつてゐる所の區別に當面するのは彼れに取つて非常に奇異なことであるに違ひない。

從來の經濟學者は、我々の見た如く、不自然な理論の必要上から、「差別的原理」にその自然な從屬的地位とは比較にならない重要度を負はしめた。等しく是認し難い遣り方で、最も顯著な位置に置かれた「置換原理」に就いても同樣である。學生は物に對して價格の支拂はれるのは、それが他の物に置き換へられ得るが故であるとの印象を得た。從つて價格は元來物が稀少なるが故に支拂はれるのであるといふ基礎的事實に覆ひ隱されて了つたのである。このことは利子論に於て殊に顯著である。ジェヴォンス*の時代から利子を以つて資本の使用が勞働に置き換へられ得るが故に支拂はるゝ價格だとして表現する慣習となつてゐる。利子はこの置換の限界生産性に依つて決定されるとか、或は又之れと同じことになるのであるが『生産期間の最後の延長の限界生産性』に依つて決定されると謂はれる時、そして又斯くの如き公式が利子といふ謎の大なる

* Jevons.

解決を表現すると發表される時こそ、眞に反動の起るべき時である。置換の可能性が問題の二生產要素の需要を、從つて又その價格をも變更する力を有するならんと爲すは大いに宜しい。併し乍らこの事實は決して利子の存在に取つて本質的なものではない。假令何等の置換も起り得ないとした所で、利子は、資本の處分と稱せられる生產要素がそれに對する需要に比して稀少なるが故に支拂はなければならないであらう。この利子存在の根據を明かにすることが利子論の第一の義務である。この事は「置換原理」が不當に最も顯著な位置に置かれた他の場合に就いても同樣に眞實である。勿論、この原理の影響を無視してはならない。併しながら物價論全體の中に在つて「稀少性原理」は基礎的原理として認めらるべきであり、問題の決定に必要な他の總べての原理は補足的原理としての正當な位置に引き戻されなければならない。是れ私が「社會經濟の理論」に於いて組織的に爲さんと試みた所である。」

この目的の爲めには玆に述べられた方程式組織は最高の價値を有することが明かとなつた。實に、この組織を物價論に導き入れるの眞に重要なることはこの方法の選擇が必然的に私が今略說した所の結果にまで導くといふことが了解されない內は決して體得され得ないのである。方程式組織が他の諸科學に於けると丁度同樣に經濟學に於いても使用される事實には何等の注意すべき點も存しないのであり、又單に之れに言及すればとて必然的に經濟理論の中心問題への深い洞察を指示する譯ではない。價格方程式組織の一切の意味はそが價格決定の全過程を通じて「稀少性原理」が演ずる役割の表現として又この過程中に於ける諸種の基礎

的生產要素の根本的對等地位の表現として見做されるとき始めて把握されるのである。「猶又私が玆に詳述せんと試みた所の全稱的費用概念は價格問題方程式組織の形態に於ける表現と密接に關聯せることが認められなければならない。」これ等の點に關して私は猶ほ多くの不明瞭と傳統的教義とが取り除かれなければ我々は同時的諸方程式の價格問題への適用を以つて經濟學の確定的業績と謂ひ得ないことを惧れる。

第四章　貨幣の稀少性理論

一般經濟理論中に於ける貨幣論の地位は、私がこれまで述べた所に依れば、如上の講演で略說された一般的價格決定問題に對する解決の性質に依つて決定せられる。我々は總べての價格が計算され得る貨幣單位を假定し、而してこの單位で計算された價格は累加的要素を除くの外は我が方程式組織に依つて決定されることを發見したのである。この程度の未決定は物價を計算する單位を一定する時にのみ除かれ得るのである。これが如何にして行はれるかを示すのが貨幣論の仕事なのである。

「貨幣の歷史的發達に就いては、計算單位に對する必要と交換手段に對する必要とが二つの別個な必要として嚴存し、これ等二個の必要は異る

手段に依つて充たされる。計算單位は常に抽象的單位となる傾向を有し而してこの單位の價値は該單位を以つてする支拂ひに對して有效と認めらるゝ支拂手段の供給に存する限界に依つて決定される」。私が第二回の講演に於いて概說したこの歷史的發達は貨幣論の進むべき方向を示すものである。「該論は諸種の貨幣制度に於いては如何にして又如何なる方法に依つて支拂手段の供給が調節され、又かくの如くして到達される所のこの供給に對する稀少性の程度が如何にして單位の購買力を決定するかを研究しなければならない。これ全貨幣論の眞髓である」。

かくて吾人は吾人の一般的經濟論の扱ひ方が貨幣論にそがより廣汎な理論の不可能な部分として有する自然的地位を與へるのみならず、大體に於いて貨幣論の仕事と方法とを決定するのである。

「若し或る支拂手段が一つの抽象的單位を以つてする支拂に對して有效と認められるとすれば、該單位が確定的價値を表現する爲めにはこれ等の手段は或る稀少程度に於いて供給されなければならない。蓋し若し支拂手段が如何なる額に於いても得られるものとするならば、如何な價格でも支拂はれ得ることゝなり從つて貨幣單位は何等の確定的購買力をも有しないことゝなるであらう。斯樣に貨幣の購買力はその抑々の發端からして必然的に支拂手段の供給の稀少性と關聯してゐるのである」。この關聯の特殊性はより精密な研究の對象とせられなければならない。「支拂手段の供給が單位の購買力にどの位影響するかを正確に知らんとすることは、勿論理論的にも論ぜられ得るが、併し經驗に依る外は殆んど確定的に答へ得られない問題である」。故に、貨幣論は常に物價の一般的水準

と支拂手段の供給との間に存する關聯に光明を投ずる目的を以つて蒐集されたる統計的資料に據らなければならないのである。

「支拂手段の供給を局限するには種々の方法があり、而して種々な貨幣形態がこれ等の方法に依つて本質的に特徴づけられる」。

「理論的には、最も單純な貨幣形態は直接國家に依つて調節せられる所の紙幣である。若しかくの如き貨幣制度が確定的安定狀態を持するとならば、國家は發行さるべき紙幣の絶對額又は頭割の額を決定しなければならぬ、或は一層良い方法としては一般の經濟的進歩と或る聯絡を保つて決定しなければならない。本質的な事柄は如何なる一定の瞬間に在つても一定額の支拂手段が存し、而してこの額が國家の調節に依つて決定せらるべきであるといふことに存する」。支拂手段の供給がこれより多くなれば明かに物價の騰貴を招來するであらう。これこそ正に國家の調節する紙幣の有する危險要素である。何んとなれば、政府はその經費に充つる財源を得んが爲め、猶ほ多くの紙幣を發行し、以つて新なる購買力を創造するであらうから。けれども、この購買力はこれに對應する購買さるべき商品の增加と釣合つてゐないから物價は騰貴することゝなる。吾人はこれを稱してインフレーションといひ、而してこの場合のインフレーションは最も單純なそうして最も明瞭な形態に於いて現はれる。

「その次に貨幣論の考慮すべき貨幣形態は中央銀行に依つて統制される紙幣である。支拂手段の供給は今や本質的に異る方法で調節されることになる。銀行はそれ自體の經費に充つる爲め貨幣を創造するのではなくて、その銀行券を貸付や割引の形式で公衆に手渡すのである」。このやう

な融通の總額は銀行に依つて或る額に一定せられるのではない。「事實上幾何借入れんと欲するかを決定することは公衆の自由であるから、銀行は貨幣を融通する際に適用する條件の外にはその總額を調節すべき何等の方法をも有しないのである。從つて、これ等の條件が支拂手段の供給の稀少性を決定する。」銀行は數種のかくの如き條件を用ひることが出來る。事實、中央銀行は常に何時でも貸付をなし得る『優良擔保*』の種類を多かれ少かれ嚴格に制限する。それは一般にその貸付期間を非常に嚴重に限定する。それは貸付金の用途をさへ制限することが出來る等……。併しながら總べてのこれ等の手段は唯第二次的に重要な比較的小さい手段に過ぎない。「銀行の支拂手段の供給を調節する本質的な手段は、借手が彼等の借金に對して支拂ふべき價格、即ち銀行の課する種々な利

* eligible securities,

率なのである。これ等の利率は一般的にその中の最も重要なもの、即ち最低割引歩合、所謂公定銀行利率に依つて決定される。「かくの如くしてこの場合に於いては支拂手段の供給、從つて又貨幣單位の購買力は銀行利率に依つて本質的に決定されることが明かである。」この重要な結果は御承知の如く、我々が貨幣論の中心問題に與へた形態の直接の結果である。特にこの立論の妥當性を否定し、而して中央銀行はかくの如き作用をなす力を有しないと主張する者がある。けれども、この見解を持する人々は次の疑問に答ふる義務がある、即ち、然らば、この場合支拂手段の供給と貨幣の購買力は如何にして決定されるか、若し彼等がこの疑問を愼重に考慮の中に入れるなら、事實上、茲に與へられたものゝ外に解答は存しないことを容易に發見するであらう。

銀行利率の騰貴が支拂手段の供給と貨幣の購買力に如何に影響するかの問題は、從來大いに議論の的となり、而して今も猶ほ然うである。從つて、私は私の著書論文に於いてこの問題を明かにする爲め大なる注意を拂つた。「一般的利子論は資本市場を平衡狀態に保つた爲め、卽ち資本處分の需要と供給との間に均衡を得させる爲めに必要な或る利率が常に存在することを示す。處で、我々が合理的銀行政策に第一に求むべきことは如何なる事情の下でもこの均衡を亂すべきでないといふことである」銀行はそれ自體の資力を越えては、唯公衆から借入れることの出來る額だけを公衆に貸付くべきである。かくの如くして銀行は實際の貯蓄に依つては滿足され得ない資本の需要を滿足する爲めにそれ自體の支拂手段なる形式に於いて名義的購買力を創造する能力を使用すべきではない。

この缺點を避ける爲めには、「明かに銀行は資本市場を平衡狀態に保つであらう利率と照應する高さにその利率を保たなければならない。この法則は中央銀行に就いて特に適切である。若し銀行利率が資本市場の眞實の稀少度に照應するよりも低く保たれるならば、資本に對する需要は中央銀行に向けられ、而して或る程度まで、剩餘支拂の創造に依つて滿足されるであらう。これはインフレーションを意味する。これに反して、若し銀行利率が資本市場の要求するよりも高く保たれるならば、支拂手段卽ち銀行券は中央銀行に返濟されデフレーションの過程が起る。

けれども、銀行利率は資本市場の利率に照應すべきであるとの法則は直接に適用出來ない。その理由は簡單である、卽ち我々は資本市場を平衡狀態に保つであらう所の利率を知らないから。」銀行はその政策の正し

さを確かめるには銀行利率の效果を觀察するより外に方法がない、卽ち若し物價の一般的水準が上昇するならば、これは銀行利率が低きに失する證左である。從つて銀行利率は、物價の一般的水準が一定に保たれるやうな高さに保たれなければならない」。とはいへこの仕事は困難なことである、蓋し銀行は物價の騰貴が既に發生するを俟つて活動を始むべきではなくて、寧ろその割引政策に依つて如何なる騰貴をも防止すべきであるからである。

「銀行利率の物價に及ぼす效果に關しては大いに見解が異る」。實際家の間に於いては銀行利率の引上げは生產費を增加し、從つて一般に物價を增大するに相違ないといふ考へが有力であるやうにさへ思はれる。理論家ですら必ずしもこの點に明かではない。私が今略說した一般的理論に照して觀る時この問題は非常に簡單となる。銀行利率が資本市場の平衡利率と一致する銀行、それは物價の一般的水準に何等の效果をも及ぼさない、蓋しかゝる際には物價水準は一定に保たれるだらうから。この關係に於いては、利率が高いか低いかは論點に全く關係のないことである。又、「若し銀行利率が資本市場の利率よりも高いならば、一般的價格水準の下落を招來するであらう。併しかゝる際この下落は專ら利率間の相違に依つて惹起されるのであつて、利率の絕對的高さとは何等の關係もないのである。勿論、資本市場に對する高い利率は、私が前の講演で示した通り、商品の相對的價格に影響する、蓋しその生產に特に多くの資本の處分を要する商品の價格が相對的に引上げられるからである。併しその代りかゝる場合には、他の價格は物價の一般的水準が不變に保たれる

程度まで下落しなければならない。この一般的水準の昇降は、唯銀行利率が資本市場の平衡狀態に照應する點より或は低く或は高く保たれることに依つてのみ惹起され得る。

「貨幣論の考察すべき第三の場合は純粹なる金貨の場合である。かくの如き通貨は存在しないのであるから、この場合は寧ろ理論一點張りである。而かも猶ほそれは實際に現存する金本位制を取扱ふ爲めの根據を明かならしめん爲め考察に値する。然らば、金貨の外に支拂手段がなく、そして公衆は金貨の自由鑄造、竝びに自由鑄潰の權を有し、尙ほその上に、金の輸出入が妨げられないと假定すれば、我々は支拂手段の供給總高は一の獨立な數量として決定されないで、國內又は廣く世界中の金の總ストックと密接に關聯せることを見出す。何んとなれば、我々の假定に依れば、金は自由に一國の貨幣のストックを出入し得るからである。それにも拘らず、支拂手段の供給には或る程度の稀少性が存する。この稀少性は金の供給の一般的稀少性と密接に關聯してをり、而して、或る程度まで、金の貨幣以外の用途と他國からの需要とに依存する。從つて該稀少性は明確な數字を以つて決定され得ないとはいへ、猶ほ且つそれは貨幣單位の價値を決定する所の客觀的事實なのである。從つて、かくの如き金本位制に在つては、國家は斷然その貨幣の購買力に干涉するを止め、而して貨幣の購買力と金の購買力とを結び付けてしまつた。

一方に於いて、金卽ち一國の貨幣ではない。その單位は往々にして信じられる如く或る重量の金ではなくて、この純粹な金本位制の場合に於いてすら、一抽象的單位としての獨立の存在を有つ。このことは金の價

格が一方に於いては造幣費に依り、又他方に於いては鑄潰費に依つて——或は、或る額の實際の鑄貨に含まるゝ金の最小重量に依つてとした方が一層好い——決定される限界内の理論的平價を中心として變動することが有り得る事實からして明かである。實際、これ等の詳細に關する造幣法の諸規則——それは舊式な見解では貨幣制度全體の核心を形造つてゐた——は、只今の理論に照して見る時は金の價値が或る狹い限界に決定さるべきことを確信する爲めの單なる技術的手段を表現するものであることが判る。このやうに金の價格を決定することに依つて抽象的貨幣單位に確定的價値が與へられる。

「これ等の準備を終へた後は我々は何時でも最も重要な貨幣制度、即ち紙幣の流通する金本位制の議論に入ることが出來る。」私は經濟學の研究に着手した初めからこの貨幣制度を以つて貨幣單位を金との或る平價に於いて維持する目的の下に中央銀行に依つて調節されてゐる一つの紙幣本位制と見做すことにした。この見解は、吾人の一般的貨幣概念から直接に來る論理的結論であつて、亦疑ひもなく近代的金本位制の施行に於いて實際に發生する事柄を最も自然に反映してゐる。確かに、かくの如き本位制に在つては、吾人はその購買力が銀行の創造する支拂手段の供給に依つて決定される所の抽象的貨幣單位に觸れなければならない。この供給は、安定な紙幣本位制の場合と同樣に、銀行利率に依り本質的に調節せられるのである。然る時は銀行の仕事は該單位が金との平價に近く保たれ得るやうな稀少性をこの供給中に維持するに在る。「これは支拂手段の供給は金の價格が鑄貨法に依つて指示される理論的價格と殆んど

等しくなるやうに調節されるべきであるといふに等しい。正確な均等は決して維持され得るものではない。「紙幣の流通する金本位制に於いては金の價格はその平價を中心とする狹い限界内で絶えず變動してゐる」。銀行家連には全く熟知せられてゐるこの事實も理論的論議に於いて往々看過される所となる。「それは、私が純粹な金本位制の場合に述べた如く、理論上は本質的に重要なことである、何んとなればそは貨幣單位が或る重量の金――この場合には金の價格の變動は論理的に不可能であらう――ではなくて、常に然うである如く、一つの抽象的單位――その價格は該單位に於いて有效な支拂手段の供給に依つてのみ決定せられる――なることを示すからである」。此處で最近の貨幣政策の發達が金本位制の本性に關するこの見解を如何に有力ならしめたかを觀察するのは興味あることである。實際、金貨の流通を廢止したチャーチル*氏の金本位制は、中央銀行に一定價格で金を賣買する義務を負はせる規定に依つて金に對し或る平價に於いて維持されることを保證されてゐる一の紙幣本位制なることは誰が見ても明かである。かくて英國の新立法に依つて金本位制の眞の本質が前面に齎らされ、又舊式の教科書が不相當に重きを置いたのであるが、結局は單に第二次的手段に過ぎなかつた所の、鑄貨法の技術的な細目は紙屑同樣斷然拋棄されてゐる。

吾人の方法に依れば總べての種類の本位制を取扱ふに就いて基礎となる統一が確保される。「我々には總べての場合に於いて貨幣の購買力は支拂手段の限られた供給にのみ依存することが判つた」。「何時でもかくの如き手段が中央銀行に依つて供給される場合、我々は貨幣單位の購買力が

* Mr. Churchill.

該銀行の信用政策、特にその適用する利率に依つて調節されるものと結論しなければならない、或は私が既に「利子の性質と必然性」中に於いて公式で表はした通り、『平衡狀態を確保せんが爲めの凡べての計劃は、その用ひんとする手段の間に相當相違があるとはいへ、究極に於いては同一の方法――銀行利率の賢明なる運用――に依存すると結論しなければならない*』。

「この結果は現時に於いて最も重要且つ最も火急な經濟問題の一つの、即ち長期間に亘つて甚だしく膨脹した紙幣本位制の後に金本位制を回復する問題を明瞭に判斷するに就いて貴重なものであることが明である。」多くの人々はこの金本位制の回復といふことの中には殆ど神秘的な困難が含まれてゐると信ずるものゝ如くである。又金本位制はよく均衡の取

* 利子の性質と必然性、163頁

れた財政を有する富裕な國民の爲にのみの本位制であるともいはれた。「されば金本位制はその根本に於いては支拂手段の供給が金の價格を殆んど一定に保つ樣な稀少程度に制限されてゐる所の紙幣本位制に過ぎないといふことを述べるのは非常に有益である。この觀點よりする時は吾人の金本位制回復運動に於ける第一階梯は諸國の紙幣本位制の安定にあらねばならぬことが直ちに明かとなる。」されば この安定は、そが出來る限り遲滯なく又新たなる波瀾を不必要に惹き起さずに到達される爲めには一般に通貨が現在眞實に有する價値を基礎として行はるべきであるとなすのは――私は實際上推奬し得る一方法としてこの點に最も重きを置くやうに努めた――亦非常に當然な結論である。」この價値が戰前の價値に非常に近い場合に於いてのみその戰前の價値の回復が實行可能な政策と

見做され得るであらう。「凡べての場合に於いて安定が齎されるや否や通貨が金本位へ復歸され得ることが明かであつた。蓋しかゝる際には我々は唯實際に獲得されてゐる金の平價を法律的に確定しさへすれば好いからである。」茲に述べた理論に照して見る時は、かくの如き金本位制を維持する爲めの困難並にこれをなす爲めの手段は、安定を得た紙幣本位制度と本質的に同一なることが判る。從つて調節された紙幣本位制から金本位制への推移は決して左程まで不思議な或は危險な方法ではないのである。けれども、一般商品に對する金の價値自體が相當變動を示す場合には、金本位制の採用は、商品に對する貨幣單位の價値が最早や一定に保たれずして金のそれに適合せしめられねばならぬといふ餘計な困難を來たすであらう。勿論、これは金本位制の缺點ではあるが、併し該制度に內在するものである、而して吾人がそれにも拘らず貨幣問題の解決法として金本位制を採用するのは、我々が本位制を政略の欲するが儘に委すよりは、金の價値といふが如き外界の客觀的要素に依存せしむることを好むからである。

私が今略說した貨幣の一般理論は我が戰時中並に戰後貨幣問題に就いて記した總べてのことの究極的理論的基礎を形造るのである。それは「世界の貨幣問題」に關して私が國際聯盟に與へた「覺書」並に私の著書「一九一四年以後の貨幣と外國爲替」Money and Foreign Exchange after 1914* の基調をなし、而して「貨幣安定問題」に關する私の最近の著書に對して特別の關係に立つものである、但しこれは十分時間がなかつた爲め、不幸にしてスウエーデン語で出版することを得たのみである。

*譯者註、拙譯「カツセル1914年以降貨幣及び外國爲替論」參照。

「私が今述べた所に從ひ、若し現存の金本位制が金の價値に相當するやうに調節されてゐる紙幣本位制であるとすれば、如何にして金の價値自體が決定されるかの問題が殘る。」この問題に對しては金の價値は世界の金の全供給額が世界の全需要額に比して稀少なることに依つて決定せられるといふより外に解答の仕樣がない。けれども、考慮に入れられる金の供給額は單なる一國家の保有高に限らるべきでなく、又、屢々假定される所であるが、世界の貨幣としての金の保有高にも限らるべきではない。これ等の數量の何れの一方も獨立の存在を有するものではない。金本位制に在つては金は國家間に於いても又貨幣用の保有高と工業用の保有高との間に於ても自由に移動する。この金の移動性が金本位制の根本的特性をなしてゐるのである。「從つて我々は必ず金本位制に於ける物價の一般的水準が如何に世界の金の全供給額に依存するかを見出さなければならない」。私は斯くの如き研究を行つた、而してその最初の成果は一九〇四年スウエーデン語で發表せられ、爾來これが展開せられて來たのである。「凡べての材料は圖形と共に私の「社會經濟理論」中に收められてゐる」、されば私は茲に唯私の研究方法の一般的觀念だけを與へることにしやう。

「若し金の價値が不變なるべきものとすれば、卽ち若し商品の價格の一般的水準が一定なるべきものとすれば、勿論、世界の經濟的進步は世界の金の供給增加を必要ならしめる。從つて我々は或る期間に於ける金の過剩とか稀少とかいふことに就いてはこれ等の概念をば該期間に對して正常的と見做され得る供給に關聯せしめないでは口にすることが出來な

いのである。併し如何なる供給が正常的なのであるか。これは次の如き質問をなすのと同じである。卽ち、或る期間を通じて物價の一般的水準を一定に保たしめ得るには世界の金の如何なる供給增加率が該期間中に必要であつたか、勿論、この質問は唯經驗に依つてのみ、卽ち長期間に亘る統計資料を蒐集するに依つてのみ答へ得るに過ぎない。この目的の爲めに、一八五〇年から一九一〇年に至る期間が特に便利である、何んとなれば一九一〇年に於ける金の價格の一般的水準が事實上一八五〇年に於けると同じだつたからである。けれども、この期間中に、世界の金保有總高が五・二倍となつた、而してこの數字は年々二・八パーセントの增加に相當するのである。從つて、假りに世界の金保有高が全期間を通じて每年二・八パーセント宛一樣に增加したものとして算出した一九一〇年に於ける保有高は正にその時實際に存した保有高と一致するであらうし、而して金の供給がその間に物價の一般的水準に何等の變化をも惹き起すべき理由が存しないことゝなるであらう。從つて一八五〇年から一九一〇年に至る世界金保有高のかくの如き一樣の增大は、同期間の各年に對する正常的な世界の金の供給額を表示するものと見做して宜しいであらう。世界の眞實の金保有高は時に大きく、時に小さかつた。故に我々も今問題にしてゐる期間の任意の時に於ける金の過剩とか稀少とかの尺度を正確な數字で示さなければならない。この目的の爲めに私は「金の相對的供給*」なる概念を導き入れた、それは所與の年の實際の金の供給額を正常的なる金の供給額で除したものである。

「この金の相對的供給のみが物價の一般的水準に何等かの影響を及ぼす

金ノ相対的供給ニ

* relative gold supply.

ものとして合理的に假定し得る唯一の要素である。」從つて、「我々の研究對象も、一八五〇年から一九一〇年に至る期間を通じて金の價格の一般的水準の實際の變動が如何なる程度までこれに相當する金の相對的供給の變動に依つて説明が付くかを見出すことでなければならない。されば我々は一は金の相對的供給を表はし他は金の價格の一般的水準を表はす所の二つの曲線を比較しなければならない。然る時は後の曲線は正に金の相對的供給を表はしてゐる曲線中に全くその相對物を有たない所の急激な短期の變動を含むことが直ちに判る。これ等の價格變動が好況時及び不況時と關聯せしむることは容易に認められる所である。我々は直ちに景氣の循環が金の供給と何等の關係もないといふ結論を抽き出すことが出來るのである。物價の一般的水準を表はす曲線から短期の價格變動を除去する時、我々は我々の金の相對的供給線に相當する著しき一つの曲線を見出す。その結論は次の如くである、卽ち物價の一般的水準の長期に亘る變動は本質的に金の相對的供給に於ける變動に依存すること是れである。」

「この研究に於いては金に對する需要の變動から生ずることあるべき作用に就いては何等言及しなかつた。」我等の曲線を猶ほ仔細に點檢するならば金に對する需要が唯二つの場合に於いてのみ一般的物價水準に何等かの影響を及ぼし得ることが判る。是等の場合の內最も重要なるものは南北戰爭當時のインフレーション時代後の金本位制回復期間中に於ける米國の金に對する莫大な需要であつた。」上述の例外を除いて、金に對する需要は世界の金の價格構成に於いて寧ろ消極的要素であつたことが判

る。

金の供給に對する物價の一般的水準の依存に關する限り、以上の點に就いての私の諸研究の結果は、よく議論の種となつた貨幣數量說の妥當性といふ問題に對して決定的解答を與ふるものだといつて差支へないであらう。

若しも世界の金保有總高が一年に二・八パーセント增加するものとすれば、年々の生產額は啻にこの數字に對應するのみならず、又平均して金保有高の〇・二パーセント見當と思はれる所の金の一年間に於ける一定の損失をも塡補するものでなければならない。されば年々の生產額は各年初に於ける金保有高の三パーセントに上る筈となる。經濟學の敎科書は常に我々に對して金の價格の著しく安定せるは――この安定あるに依つて金は特に幣制の標準として役立ち得るのである――世界が莫大な金を蓄積して保有せる爲め年々の生產額はこの蓄積された保有高に比較すれば無視することが出來るといふ事實に據るのだと敎へた。この敎義は、何等批判さるゝことなくして極めて一般的に認められて來たのであるが、吾人の擧げた數字に照して觀る時は、全く無效なることが判る。安定なるものは、蓄積された保有高が『莫大*』であるとか、或はこれに類した額であるべきことを要するのではなくて、單に年々の生產額に比して三十三倍三分の一だけ大きければ宜しいのである。

「安定に必要な年々の供給額は蓄積された保有高の或るパーセンテージであるから、それは明かに保有高それ自體が增大すると同じ率を以つて增大しなければならないものである。これは極めて重要な結論である。

* enormous.

その結果は、實に、次の如くなる。卽ち金の生產額が假令現在如何に豐富であらうとも若し引續き變化がないならば、或る年月の內には不十分となつて來なければならない、何となれば生產は保有高の增加を來たし、而して保有高が增大する時は、世界の經濟的進步に照應する保有高の年々の增加も亦同じく增加しなければならぬことゝなり、而して早晩一定の生產額を凌駕するからである。「若し金の年々の生產額が經濟的進步に應ずる爲め必要な蓄積された保有高のパーセンテージに及ばないならば金本位制に於ける物價の一般的水準は下落しなければならない」。故に、若し世界が年々の金の生產を增加することが不可能となるに至り、從つて一定量の金の生產額を以つて滿足することが必要となるならば——實際に生產が遞減する場合は措いて——世界は不斷に繼續する物價の一般的水準の下落とこれに伴ふ經濟的不振とに直面しなければならないであらう。「されば金本位制は世界がその一般的經濟的進步が示すと同じ率で年々の金の生產を限りなく增加して行くことが出來るといふ條件の下に於てのみ滿足な本位制であるといはなければならない」。

現今の狀態では如上の觀察は特別の興味を唆る。蓋し今や世界の金の年產額が一八一五年に達せられた最高額より著しく降り、而して今や金の蓄積された保有高の三パーセントよりも遙かに少くなつてゐるからである。併し、このことは將來に對して金の供給が不十分となり、從つて物價の一般的水準が下ることを意味するに違ひない。かくの如く不十分になるといふことは全く驚くべき金の新發見が全局面を變化するにあらざればこれを避ける譯に行かないのである。けれども、今暫らくのとこ

ろ、この困難は、大戰並に大戰直後の時代に生じた幣制上の事變に依つて惹起された金の一時的過剩の爲め押し遣られてゐるのである。事實上吾人は玆に全貨幣史上にその比類を見ない所の金に對する需要の著しき減少を取扱はねばならないのである。多數の歐洲諸國から金が驅逐せられ、而して大部分が米國に蓄積せられたのである、爲めに同國に於ては非常な金の過剩を來たした。その結果は金の價格の一般的水準の異常な昂騰となつた。實際、若しも米國人が彼等の金保有高を大部分恰もそれが將來の必要に應ずる爲めの準備金であるかの如く取扱ふことの適當なる所以を悟らなかつたならば、物價の騰貴は一層著しかつたであらう。人々はこの金の過剩に眩惑されて、多くの場合、大局を觀取することが出來なかつた。併しながらこの過剩も一時的現象たるに過ぎない。大陸諸國は金本位制回復の爲め金を要するであらうから、金は再び歐洲に歸り來るべきものである。事實上、この移動は既に始まつてゐるのであつて、過去二三年間に於いて斯程まで不必要な心配の種となつた金の過剩も既に消滅しかゝつてゐるのである。併し、これに關聯して最も重要なことは將來に於ける世界の進歩である。この進歩は恐らく一八五〇年乃至一九一〇年のそれよりも緩漫であるだらう、併し世界は確かに停頓狀態に甘んじて服しやうとはしてゐない。從つて、現下の生産額では必ず不十分であることが判るであらう。若し金の供給を大いに實質的に增加することが不可能であるならば、今のところ準備金として保有されてゐるものと見做され得べき米國の金保有高の一部分が、增大して行く世界の需要に振り當てられるや否や、重大な金の缺乏に直面しなければなら

なくなるであらう。

事態かくの如くであるからして聰明なる貨幣政策は來たるべき金の稀少をして物價の上に抑壓的作用を及ぼさしめない程度にまで世界の貨幣用としての金の需要を制限することが果して可能なりや否やの問題を眞面目に考慮しなければならない。一九二二年ゼノアに開催された「國際財政會議*」は本問題を議して世界の貨幣用の金の需要を制限すべきことを明かに提唱した。この提唱は世界の進歩が年々の金の供給が絶えず增加して行くのを必要とすることを豫想しなければならない時期であるに拘らず現今の生產額が殆んど一定してゐる爲めに惹起される金の稀少から生ずる恐るべき危險を明かに洞察したから爲されたのである。

「貨幣價値が如何にして決定されるかの說明の根本として支拂手段の稀

* The International Financial Conference.

少といふことを擧げ、又諸國の金本位制を以つて單に金に對して或る平價を保つやうに調節されてゐる紙幣本位制に過ぎないと見做す所の貨幣說」――かくの如き理論は大戰中貨幣界に於いて眞實に發生しつゝあつた事件に就いて明瞭な判斷を下さしむるに就いて特に適切であつたことが明かである。凡べての國に於いて非常時の必要上已むを得ずとの理由で――又物價が騰貴したからといふ理由でさへ――辯護された新通貨の絶え間なき創設は、この理論に照して觀れば、既に存在してゐる正規の購買力とはどうしても相容れず、爲めに、物價の騰貴を來たすべき、名目上の購買力の創設であつたことが直ちに判るであらう。けれども、この簡單な眞理が一般に認められるまでには、長い間の波瀾重疊があつた。若し、科學的敎訓が際限なく行はれたインフレーションを伴つた通貨の

徹底的破壞といふ教訓から計り知るべからざるまでに有力な支持を受けなかつたとすれば、以上述べたことが果して今日に於けるが如く一般に認めらるゝに至つたかどうかは猶ほ疑問である。

私は未だに所謂貨幣數量說*を以つてその眞理がアプリオリに認めらるべき一つの教義であると見做すことが出來ないのである。私は從來から常に支拂手段の供給增加が貨幣の購買力に及ぼす影響は實際の經驗に照して研究さるべきものであると考へてゐる。金の供給といふことに關して、私は只今述べたやうな方法でかくの如き研究をなし來たつたのである。理論上からいへば最も單純である所の紙幣本位制の場合を點檢するに就いては、大戰竝びに大戰後がこの上もなく豐富で且つ多樣な材料を供給してくれる筈である。これは經濟學の進步に取つて又とない好機會

* quantitative theory of money.

である。「私は研究の結果數量說をその從來の公式に依るよりももつとよく實際に發生する所と合致するやうに思はれる形で表現するに至つた。私の公式は次の如くである。若し新なる支拂手段が創設されるならば——法貨の形態に於いて創設されるにしろ或は又銀行の支拂手段 banking means of payment なる形態に於て創設されるにしろ何れにしても——新なる購買力が創設される。その結果は物價の騰貴を來たすに違ひない。吾人はこの騰貴がどの位の大きさになるかを的確に言ひ現はすことは出來ない。併しながら一旦物價の騰貴が起る時は、支拂手段に對する眞實の必要も明かに同一の割合を以つて增加するであらう。かくて社會はより高い物價水準に於いて必要とするだけそれだけ多くの新なる支拂手段を有つことになるであらう。新たに創設された支拂手段の殘餘部分はこ

れを創設した銀行に歸つて行くであらう。この結果物價の一般的水準と支拂手段の全供給とが共に同一割合を以つて增加されることゝなる。ところで、若しこの行程が絶えず繰返へされるならば、支拂手段の供給は常に增加し、同時に物價の一般水準も略〻同一割合で上騰するであらう。この兩要素の同時的で且つ比例の取れた增加の原因は、疑ひもなく、新支拂手段なる形態に於いて絶えず人爲的購買力を創設するといふことに存するのである。上述の行程に於いて原因となり結果となる所のものをかくの如く決定するといふことは貨幣數量說の最も重要な一面であつてこれは私が今貨幣數量說に與へた形態に於いては反駁することは出來ないやうに思はれる。併しながらこの原因の決定はインフレーションに對する責任の所在を明かにしたので、各國の當局者側に於いては私の分析の不正確なことを證明し又多くの不明瞭な字句の背後に在る眞實な關係を隱蔽せんとして熱心な努力が拂はれたのである。斯樣な努力の爲め實際の經驗上或は有り得る理論からの總べてのデヴィエーションが不當に重要視されたのである。併しながらこれ等のデヴィエーションに非常に重さを置いた人々は相對應する事件に對しては通常何等の徹底した說明をも與へることが出來なかつた。これは全く當然なことである。何んとなればかくの如きデヴィエーション、例へば、支拂手段の增加に越ゆる價格の騰貴といふが如きことはこれ等のデヴィエーションの本體、卽ち研究對象となつてゐる諸々の推移の本質的部分を表現するといふ否定すべからざる價値を有する一般的原則からのデヴィエーションとしてこれを研究するのが疑ひもなく最も好い方法であるからである。

インフレーションに次いで發生した異常な爲替の攪亂を眞實に理解するに就いても亦、それ以前の私の理論的研究が大いに資する所のあることが判つた。私は大學の講義に於いて爲替の理論を次の如き基礎的事實の上に築き上げるのを常とした、(卽ち我々が外國の通貨に對して支拂ふ額は我々がその通貨を以つて或る物資を購買せんと欲する時それに對して我々の獲得し得る數量卽ち該通貨の對內的購買力に依つて本質的に決定せらるゝと)。從つて我々は外國の通貨に對してはその外國に於ける物價の一般的水準に反比例する價格を支拂はなければならないのである。我々が自國の通貨を以つて支拂ひ得る額は自國內の一般的物價水準に直接比例しなければならないことも同樣に明瞭である。されば爲替の率は本質的に二關係國の對內的購買力の高に依つて決定せられなければならない。

以上の理論は第一に紙幣に關係してゐるのである。併し金貨は本質的には金の價値を一つの理論的平價に、併し事實上金の輸送點以內に、保つやう調節されたる一つの紙幣であると見做されるから、この理論は爲替が金の輸送點以內に在る限り金本位制に對しても同じやうに當て嵌まるのである。金支拂の可能性は、支拂の爲め利用し得る何程かの金の存する限り、爲替の變動をして金の輸送點を越ゆることなからしめ以つてその變動を少からしめる所の一要素となる。この方法で總べての本位制に同樣に妥當する爲替理論を構成することが可能であつたのであつた。明かにこれはインフレーション時代中に世界の爲替に發生した異常な變化を正しく判斷するに就いて非常な助けとなることが判つたのである。

爲替革命*の當初に當つて、信じ難い位に感じられた爲替の變動を說明する爲めに、或は寧ろこれが言ひ譯をする爲めに凡べての種類の方法が用ひられた。一般にこの攪亂は全く一時的なものであり、從つて世界の貿易が正常的狀態を回復するや否や改善せられるだらうと信じられた。これ等の見解に反して科學的分析は爲替變動の本質的原因が通貨の對內價値、卽ちその對內的購買力の變動中に見出さるべきことを示したのである。唯これ等の變動のみが通貨間の眞實の平價を變動せしめる效果があつたのである。爲替の新なる平衡は舊平價と兩通貨のインフレーションの度合の商との乘積に依つてのみ決定せられなければならない。この新平價に對して私は『購買力平價**』なる名稱を與へたのである。勿論、舊平價は正しく購買力平價であつたのである、而して新平價は關係二通

* revolution of exchanges.
** the purchasing power parity.

貨間の對內的購買力の變化に依つて、それから脫胎したのである。

兩國內に於ける物價に關して吾人の有する知識のみを土臺として二通貨間に存する購買力平價を的確に計算するのは殆んど不可能である。餘り澤山の要素が問題中に入つて來る爲めにこれを餘り複雜ならしめ以つて直接の計算を困難にする。併しながら若し我々が一旦二國內の或る物價水準に對する平價狀態に於いて存在した平價を知るならば、この平價を以つて他の物價水準に對する平價計算の出發點とすれば宜しいのである。これが正に私が戰前の實際の平價を基として戰時竝に戰後の購買力平價を計算するに際して爲した所である。勿論、私の方法及び結果に對する多くの批評を見た。併しながらこれ等の批評家は二組に分たれる。その一方は私の說を不合理であるとなし他の一方はそれを自明の理なり

と稱した。けれども、次第に、購買力平價說の本質的に正確なること又この說が激しい市場の變動に曝された爲替の眞實の價値を判斷するに就いて實際的に有用であることを示すに足る經驗が積んで來た。經濟學說の入つて來る總べての他の場合と同樣に、この場合に於いても、デヴィエーションが存在してをつた。それ故に本學說、及びその如何なるものたるとを問はず確定した學說の反對者達は、これ等のデヴィエーションを最も良く利用しやうと試みたのである。事實上、これ等のデヴィエーションは時に重要であつたこともあり又非常に興味ある現象を顯現せしめたこともあつた。併し乍ら若し爲替變動の主たる原因、卽ち購買力平價の變動が先づ考慮に入れられたならば是等の現象は最も良く研究せられることが出來たであらう。私は購買力平價に對する爲替のデヴィエーション、その原因及び結果、特に國際貿易に及ぼす結果に多大の注意を拂つて來たのであるが、購買力平價の概念が實際上一般的に認めらるゝに至つた今日に於いては、かくの如き研究は世界中の總べての地で行はれてゐる。こんな風にして爲替問題に對する我々の理解が或は大いに進歩するものと考へて差支へないであらう。

勿論、平常的狀態が回復せられ始め、その結果購買力平價からのデヴィエーションが消滅すべきことが期待されない間は、購買力平價說の妥當性の最後の證明が與へ得られないであらう。この二三年間、世界の通貨中最も重要なるもの、卽ち、英米の磅と弗とに就いては、主としてこの通りであつた。私が最近の Quaterly Report of the Skandinavisha Kreditaktiebolaget* 中に示した通り、一九一九年以來右の通貨間の實際の爲

* ストツクホルム、1925年四月、